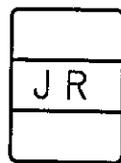
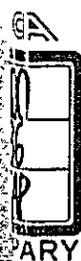
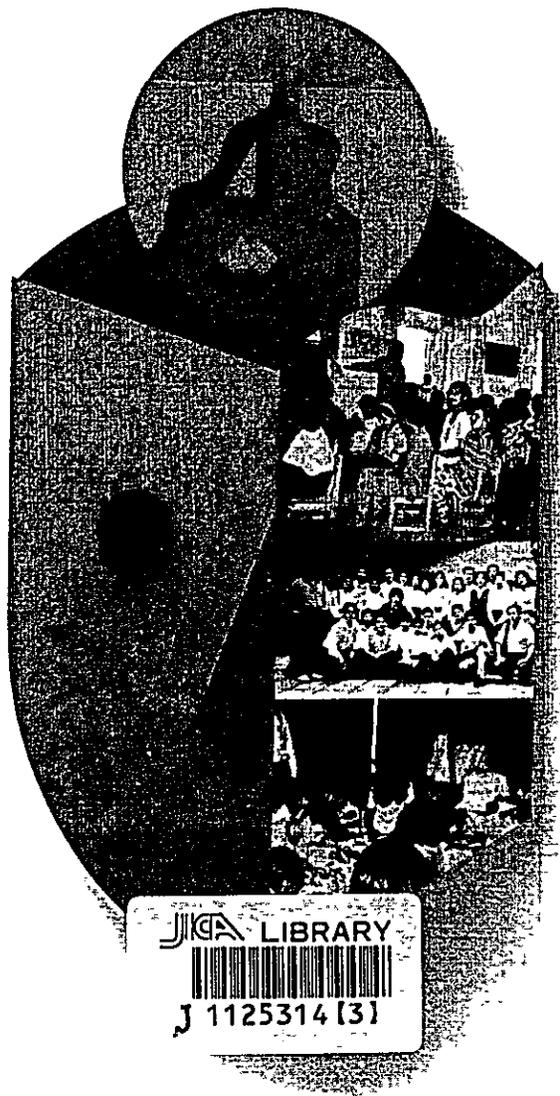


平成7年度 高校教師海外研修 ～開発教育への視点～

地球と共に生きる



国際協力事業団



平成 7 年度高校教師海外研修

～開発教育への視点～

地球と共に生きる



1125314 [3]

序 文

国際協力事業団（JICA）では、より多くの高校生に開発途上国の現状に目を向け、途上国の抱える問題と地球の将来について考えてもらうことを目的として開発教育の推進に取り組んでおります。

わが国は国際社会のなかで食糧や資源の多くを開発途上国に依存するなど、貿易、投資等をはじめとして、緊密な関係にある途上国の抱える様々な問題と無関係であることは出来ません。また、環境問題などの世界的規模の問題は一国の問題ではすまされず、全ての国々が解決に向けて力を合わせて取り組む必要があります。世界的に各国の相互依存関係が進む中で、次の世代を担う高校生に対する開発教育の推進は重要性を増しております。

当事業団では、開発教育推進の一環として、全国の高等学校において開発教育・国際理解教育の実践・研究をしている全国高等学校国際教育研究協議会（全国国際教）の加盟校の先生方を中心に、毎年、開発途上国への研修旅行を実施しております。

今回の研修では、参加者の一般公募により全国から172名もの応募がありました。選考の結果、マレーシア10名、パラグアイ10名、エジプト・ヨルダン9名、合計29名の先生方に7月から8月にかけて約10日間の研修に参加していただきました。各参加者には、訪問国の経済・社会・教育事情やJICAの活動現場を視察してもらい、開発途上国についての見聞・理解を深めていただきました。

この度、この研修で得た見聞を教育の現場において実際の授業に反映するため、参加者有志のご協力により、開発教育の事例等も含めて冊子を作成しましたので、関係各位のご高覧に供したいと思っております。この冊子が、今後の開発教育推進の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本冊子作成にご尽力並びに寄稿していただいた先生方に厚くお礼申し上げます。

平成8年2月

国際協力事業団

総務部長 小川郷太郎

目 次

序文.....	3
第1章 研修成果を生かした授業実践例	
増える日系人労働者は何を訴えるのか	南澤 英夫 8
開発教育という視点を取り入れた英語教育の試み	黒澤 進 16
沙漠を緑に！	小辻 俊雄 26
異文化コミュニケーション力の育成	神里 涼子 32
豊かなマレーシア	青木 孝夫 40
～先進国に必要な姿勢とは？～	
共に学び合う視点で	掛端不似子 48
～マレーシアを題材にして～	
第2章 研修参加の前提になったもの～実践展開事例～	
こうすれば書ける エッセイコンテスト	矢野 佳津 56
特別活動における開発教育の実践をめざして	高橋 壯治 60
～ユネスコ活動、それは開発教育の原点～	

第3章 研修レポート

どちらが地球の裏側なのですか？	半澤 典子	66
「インシャーアッラー」～神の心に生きる人々～	吉岡 雅樹	78
緑のマレーシア	中林 千景	86

第4章 平成7年度高校教師海外研修資料

1. 募集概要		94
2. 事前研修とその内容		94
3. コース別日程／参加者氏名		102
4. 開発教育参考資料		108





2025年度教育研究報告書
2025年度教育研究報告書

第1章

研修成果を生かした授業実践例

増える日系人労働者は何を訴えるのか



青森県立川内高等学校
教諭（社会） 南澤英夫（パラグアイ班）

1. はじめに

今回の高校教師海外研修（パラグアイ班）の中で、最も多くの時間をかけて見てきたものは、日系移住者の生活の様子と、移住者を支援する国際協力事業団（JICA）の支援活動であった。

1936年に始まったパラグアイへの日本人移住は、日本、パラグアイ両国間の大きな架け橋となってきた。現在南米社会の多くが累積債務、インフレ、失業などの問題を抱える中、パラグアイは比較的安定した状況にある。しかし、そのパラグアイでさえ、最近日本への出稼ぎ労働者が増えているという。

この日本を目指す日系人の様子から、南米社会の抱える問題や、先進国、開発途上国の経済格差を学ぶことができる。また、移住者の歴史を通して、日本の国際協力のあり方を知り、さらに現在日系人社会が抱える諸問題に共感できる。

また、日系人の視点から、今の日本のあり方、日本人の生き方、豊かさなどについての問題点も明確になっていく。

そこで、現代社会の授業の内容を日系人とその社会に絞り、問題をひきよせて考えることにポイントを置き教材化を試みた。

2. 単元の目標

- 1 南米からの日系人労働者の実態から、南米の経済問題、日本と途上国の経済格差などについて理解する。〔知識理解〕
- 2 パラグアイにおける移住者の歴史から、移住者の生活、国際協力の実情について理解する。〔知識理解〕
- 3 資料や統計資料（グラフ・統計）から、必要な情報を読み取ることができるようになる。〔技能習得〕
- 4 先進工業国と途上国の間に存在する、開発問題に積極的に関心を持つ。〔態度変容〕
- 5 日系人からのアンケートを通じ、日本社会の問題点を知り、さらに、物質的なものだけでなく、「豊かさ」について考える。〔態度変容〕

3. 各授業の主題と目標

1時間目 現状の把握 主題「移住者の生活を知る」

日系人の南米諸国への移住は、新天地で

の経済的な成功を求めているものが多い。移住の歴史を学ぶことにより、当時の日本の経済・社会状況、移住者の生活、ODAをはじめとする日本の援助などの実情が見えてくる。

主な発問・呼びかけ	学 習 活 動	資 料
設問 南米へ移住した人たちの夢は叶ったか 1 パラグアイへの移住者の歴史について調べよう。 2 移住の目的はなんだろうか。 3 移住者の暮らしぶりはどうだろうか。 4 移住が成功した原因はなんだろうか。 5 移住者の推移を日本の経済状況と比較しながら調べよう。 6. 調べた結果、何がわかるか考えよう。	写真から予想する (動機付け) パラグアイ移住者へのアンケート やビデオから読み取る 統計資料から読み取る	写真1、2 資料1 (省略) アンケート (P.14参照) 資料2
生徒の学習内容 1. 移住が新天地での成功を求めた、経済的要素が強いことがわかる。 2. 現在の日系人社会が比較的豊かであることがわかる。 3. 移住の成功のかけには、移住者の努力と、日本のODAを含めた援助が大きな影響を与えたことがわかる。 4. 日本経済が弱かった頃に移住者が多く、日本経済が強くなってからは移住者が少なくなったことがわかる (経済的要因が大きいことが理解される)。		

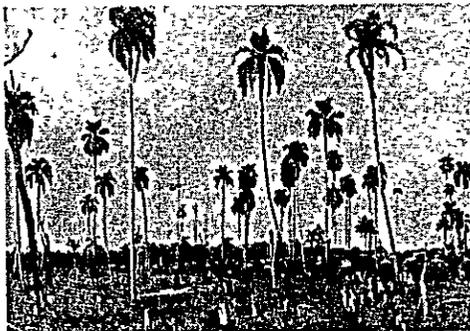


写真1 開拓2年目の大豆畑。切り株が開拓の苦勞を偲ぼせる

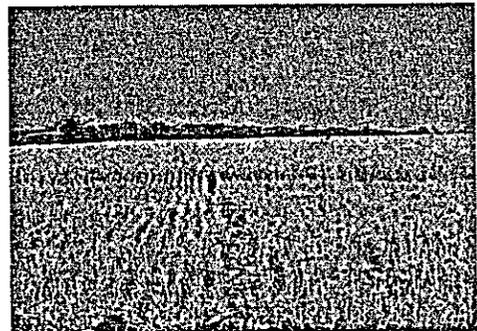
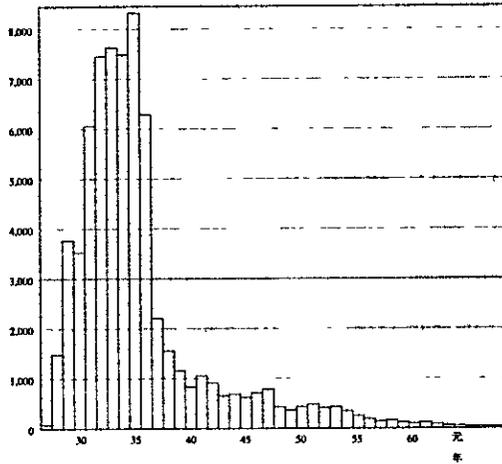


写真2 大型機械化時代の到来。小麦の収穫は一気にスピードアップされた (1985年)

資料2 「南米移住者数」(東北6県・全国集計含む/年度別)
(国際協力事業団東北支部概要から)



2時間目 問題の追求 主題「なぜ、日本で日系人労働者は増えているのか」

日系人移住者の多くは、1945～60年代にかけ、新天地での経済的成功を目指し、日本から移住した。しかし、その後の日本経済は移住者の思いと裏腹に、驚異的な経済成長を遂げた。日本が先進国として繁栄する一方、南米の多くの国々は累積債務、環境問題を抱える途上国となり、経済格差

は拡大している。

また、1990年の出入国管理法の改正によって、日系人2世3世とその家族は、日本人の配偶者、または定住者として、在留期間中の就労に制限がなくなった。そのため、多くの日系人が単純労働者として、日本に出稼ぎに来るといった状況が一挙に加速した。

経済的成功を夢見た移住者の子孫が、今

主な発問・呼びかけ	学習活動	資料
設問 なぜ日系人労働者は増加したのか (ブラジルを例に考える) 1 日本に来ている日系人労働者の数を調べよう。 2 なぜ、南米から多くの日系人が労働者として来るのだろうか。 3 ブラジルの経済状態はどうなっているのか。 4 80年代後半からの日本の経済状況はどうなっているだろうか。 5 1990年の出入国管理法の改正によって、日系人の立場はどう変わったのか。 6 日系人労働者はどのような場所に就労したのだろうか。	資料から問題点を整理する 資料を読み取る 考察 資料を読み取る 資料を読み取る 資料をもとに考察	資料3 資料4 資料5 資料6 (省略)
生徒の学習内容 1. 日系人労働者が増えた背景に、①移住国の経済・社会状況。②日本の労働不足という経済状況。③世界的な経済格差などの問題が複合的にあることを理解できる。 2. 政府の出入国管理法改正が、日系人移住者の増加に拍車をかけたことがわかる。 3. 日本経済の中で、構造的に移住者をはじめとする外国人労働者を必要としている事実がわかる。		

また経済的成功を求めて日本に来るようになった。その背景には移住国、日本の経済

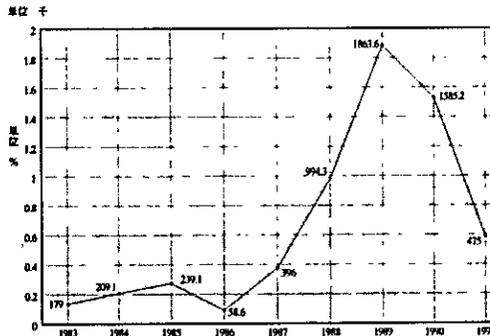
状況の他、世界規模での南北問題が横たわっていることを学ばせたい。

資料3 国籍別登録外国人数

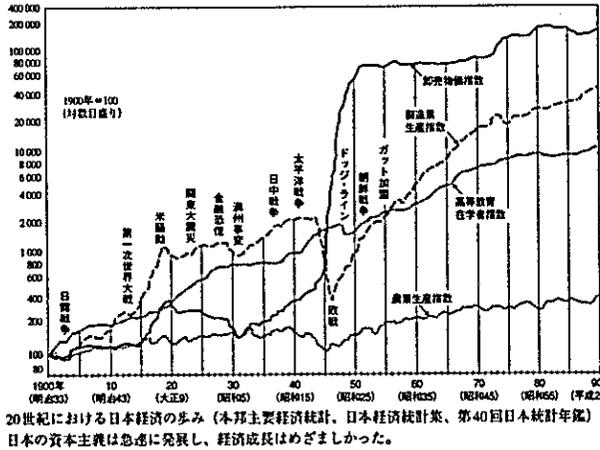
国 籍	昭和50年末	55年末	60年末	平成2年末	3年末	4年末	5年末
総 数	751 842	782 910	850 612	1 075 317	1 218 891	1 281 644	1 320 748
ア ジ ア	206 784	734 476	789 729	924 560	974 551	1 000 673	1 027 304
韓 国	647 156	664 536	683 313	687 940	693 050	688 144	682 276
中 国	48 728	52 896	74 924	150 339	171 071	195 334	210 138
フ リ ビン	3 035	5 547	12 261	49 092	61 837	62 218	73 057
タ イ	1 046	1 276	2 642	6 724	8 912	10 460	11 765
ベ ト ナ ム	1 041	2 742	4 126	6 233	6 410	6 883	7 609
ラ シ ア	206	235	682	1 237	3 419	4 516	6 754
ド イ ツ	1 119	1 448	1 704	3 623	4 574	5 201	5 647
イ ン シ ア	718	744	1 761	4 683	5 639	5 744	5 461
マ イ ナ	1 668	1 944	2 546	3 107	3 653	4 035	4 642
キ タ	248	437	1 032	2 067	3 741	4 124	4 443
マ ヤ	a)146	a)186	a)312	1 221	2 454	3 122	3 561
パ ン	108	260	684	2 109	2 542	2 905	3 319
ス リ	285	268	509	1 206	1 658	2 097	2 375
カ ン	98	164	784	1 171	1 177	1 280	1 312
ノ ン	415	681	768	1 194	1 283	1 258	1 300
ガ ー	767	1 112	1 681	2 614	3 131	3 352	3 645
シ ン							
セ の							
ヨ ー	14 480	15 897	19 473	25 563	29 078	29 899	31 046
ロ ッ	4 051	4 956	6 792	10 206	11 794	12 021	12 244
ド ギ	b)2 740	b)2 800	b)3 137	3 606	3 821	3 846	3 827
フ ラ	1 484	1 818	2 392	3 166	3 517	3 628	3 588
イ タ	c)269	c)345	c)322	c)440	691	966	1 335
リ	677	744	808	940	1 091	1 107	1 116
ス ペ	606	666	725	856	960	958	964
イ ン	842	742	802	980	994	974	948
ア イ	151	195	280	671	866	897	916
ラ イ	555	425	669	749	779	876	819
オ ウ	564	538	564	586	620	668	765
ス エ	2 541	2 668	2 982	3 363	3 945	4 008	4 324
北	23 970	24 743	32 239	44 643	50 100	50 421	51 057
ア	21 976	22 401	29 044	38 364	42 498	42 482	42 639
メ	1 338	1 698	2 401	4 909	5 903	6 132	6 450
リ	266	418	487	786	927	944	1 053
カ	190	226	307	584	772	863	915
メ							
南	2 324	2 719	3 608	71 495	153 099	187 140	196 491
ア	1 418	1 492	1 955	56 429	119 333	147 803	154 650
ラ	308	348	480	10 279	26 281	31 051	33 169
ペ	249	293	329	2 656	3 366	3 289	2 934
ル	349	586	844	2 131	4 119	4 997	5 738
ア	366	795	1 109	2 140	3 364	4 027	4 749
ナ	31	63	81	193	958	1 315	1 468
ガ	14	30	98	598	745	846	1 098
エ	93	206	268	368	428	468	545
ジ	228	496	662	981	1 233	1 398	1 638
オ	1 242	1 561	2 472	5 440	7 224	7 982	8 601
セ	930	1 117	1 842	3 975	5 392	5 890	6 269
ア	258	386	536	1 275	1 622	1 877	2 094
ニ	54	58	94	190	210	215	238
ユ							
ウ							
グ							
ラ							
ン							
ド							
ラ							
ン							
ド							
の							
他							
無	2 676	2 719	1 982	1 476	1 475	1 502	1 500

総務庁統計局「日本の統計」1995年から

資料4 ブラジルの年間消費者物価上昇率
(注) ブラジル地理統計院のINPC



資料5 日本の経済成長



3時間目 問題解決への模索 主題「日系人労働者は何を訴えるのか」

1990年の出入国管理法の改正以来増加した日系人労働者は、日本人としての血縁を強調しながらも、一方では移住国の国民であり、日本で生まれ育った日本人とは区別され外国人労働者の一部としてみなされている。

日本ではまだ原則として、日本人労働者によって代替可能な通常の労働に従事することを目的としている外国人の入国を認め

ていない。しかし、実際には不法滞在する外国人の数は、1992年で約29万人といわれ、政府として外国人労働者を認めないとしても、現実には日本の労働構造の中に組み込まれ重要な地位を占めるようになってきている。

日本での外国人労働者が増加するにつれ、そこに起因するさまざまな労働問題がおきている。日系人問題は日本での就労が認められていることもあり、日本における外国人労働者問題を先取りしたものという

主な発問・呼びかけ	学習活動	資料
設問 日本での日系人はどのような問題を抱えているのだろうか (外国人労働者として考えて)。 1 日系人労働者は日本の中で、どのような役割を果たしているのだろうか。 2 日系人労働者の中で、どのような問題がおきているのだろうか。 3 労働問題以外の問題はないのか。 4 どのような対策が必要なのだろうか。	ビデオを試聴し、問題を整理する。 ビデオについては (注1) を参照 資料から読み取る ディスカッション	ビデオ 資料7 (省略)
生徒の学習内容 1. 日系人労働者の問題を指摘できる。 2. 日系人労働者問題への対策を考えることができる。 3. 日本に外国人労働問題が存在することを知り、不法就労に係わる多くの問題点があることを理解でき、その対策を考えることができる。 4. 労働問題以外にも、言葉、子供の教育、生活習慣など実生活での問題もあることもわかる。 5. 労働の国際化が進む日本で、これからとるべき行動を模索できる。		

点を持っている。1990年の入管法の改正から5年がたち、当初の問題も少しずつ改善されてきている。しかし、労働の国際化がすすみ一定数の外国人労働者がいる日本社会がどのように変容していくのか。またどのような対策が必要なのか行政、地域、住民の対応などを通して多方面にわたる国際化を考えさせたい。

4時間目 発展学習 主題「日本人の生活は本当に豊かか」

今回の研修中、パラグアイ在住の日系人の方々に「移住者の現状と日本への思い」という内容のアンケートをお願いした（アンケートは本校生徒が国際教育研究発表大

会に向けて立案、作成したものである）。

20名の方に依頼し15名の方から回答をいただいた。その中には移住への夢、期待、移住先での苦勞、日本人としての日本に対する強い思いなどが、びっしりと書かれていた。日本の現状に対する批判、また、祖国を思う気持ちから、今の日本から何が失われようとしているのか、豊かな生活とはなにか、ということが考えさせられる。

日本に働きに来ていながらも、経済的な問題が解決されるならパラグアイでの生活を選ぶ。それも人間的な豊かさという基準でという移住者の生の声をもとに、「豊かさ」について考えさせたい。

主な発問・呼びかけ	学習活動	資料
設問 移住した人達は、今の日本をどのように見ているのだろうか。 1 移住者へのアンケートを読もう。 2 日本の何が問題なのだろうか。 3 本当の豊かさとはなんだろうか。	アンケートから読み取る レポートを書く	アンケート
生徒の学習内容 経済優先社会の日本をふりかえり、豊かさとは何かについて考えることができる。		

4. おわりに

今回の「日系人労働者の問題」教材化にあたり、多くのことが自分の中で意識できた。

第1に現在の日本に対する高い評価の背景にある日本人移民の歴史と努力。

第2に日系人労働者の問題と日本の労働の国際化。

第3に日系人労働者急増に背景にある、

南米諸国の経済社会状況。

第4に本当の豊かさについてなどである。

問題は多岐にわたり、その内容ひとつひとつをどのように位置づけ、授業に取り込んでいくかが最も難しいことであった。

また、教材化にあたってはJICAの方々をはじめとする、多くの方々からの協力がなければ実現できなかったことであり、この場をお借りし感謝を申し上げたい。

(注1)

◎ビデオ資料 「日系人と入国管理」

1994年2月25日のニュースステーション特集(約15分)の録画。

日本では1994年現在約15万人を超える南米出身の日系人が働いている。かれらのほとんどが1990年の入国管理法改正を機にブラジルやペルーから来日した日系2世3世で、単純労働者として日本経済の発展をささえてきたが、長引く不況により日系人を取り巻く状況は厳しくなってきた。

◎資料1

「移住事業の概要と課題」 国際協力事業団 企画部移住企画調整課

内容 ①海外移住の変遷 ②移住者・日系人の活躍 ③国際協力事業団の移住事業の課題 など

◎資料6

日本の入国管理に係わる官報(平成2年5月24日)の要約

「日系人2世、3世およびその家族」は「日本人の配偶者など」または、「定住者」という資格で、その在留期間中の就労にも制限がなくなった。

つまり、日系人2世、3世の配偶者と家族の、日本での労働が認められたということ。ただし、4世以降については認められない。

◎資料7

「平成4年度 日系人本邦就労者実態調査報告書」 国際協力事業団

日系人 移住者へのアンケートの抜粋
対象日系人1世・15名

Q1. なぜ移住しようと思ったのですか。

- ・あこがれ。
- ・不況のため。
- ・終戦後、生活がとてもしんどかったため。
- ・日本政府の推奨(岸内閣当時の日本は、就職難、食糧難の解決策として国民の海外転出を推奨する政策を取っていた)。

・説明不能。強いて言えばいきがいを求めて。
・田舎を出て都会で生活していたが、その都会の生活、日本の生活に疲れたというかイヤになったから漠然と考えるようになった。

・不毛の原始林を開拓し、自己の開発と同時に移住先国の発展に寄与するため。
・実家が移住を決めた。私も戦争のない国へ行きたいと思っていたから。

Q2. パラグアイに行くとき抱いていた夢は何ですか。

- ・人生をためたかった。
- ・広々とした国でのおおらかな生活。
- ・何もなかった(夫についてきただけ)。
- ・牧場を経営したかった。
- ・のびのびと仕事ができる。また「カスミ」を食べて生きていると言われる仙人の如く、生活ができると思った。
- ・(まだ子供だったので)南米の楽園を想像して、果物等が豊富に食べられると思ったのと、広々とした耕地で、のんびり暮らせると思ったから。

・県庁やいろいろな方の話を聞いて、地上の楽園と思い、一度きりの人生、違った国民習慣の所でスタートして、自分を試してみたいと思った。

Q3. パラグアイへ移住する前に不安に思ったことは何ですか。(複数回答可)

- ・医療 10
- ・生活習慣の違い 33
- ・教育 8
- ・食べ物の違い 11
- ・治安の善し悪し 6
- ・地元の人とうまくやっつけられるか
- ・言葉の違い 4
- ・その他 ・経済

Q4. また、パラグアイに移住して良かったことは何ですか。

- ・親目的。
- ・のびのび暮らせる。
- ・比較的治安が良い。
- ・台風や地震がない。
- ・日本で問題になっている学校のいじめなどがいないこと。
- ・物心両面で、広い天地(将来性がある)だと実感し、精神的には豊かな(のびのびとした)生活ができたこと。

・子供の教育を、お金のためにあきらめなくてすむから。
・努力によって広い大地はパラグアイの穀食地帯になったこと。大豆は日本人によってパラグアイの輸出農作物になったこと。当国には輸出する作物は大豆と綿だけ。野菜はパラグアイ人は食べていなかったが、日本人が来てからいろいろな野菜が市場に出るようになった。現地の人も野菜を食べるようになった。

・違った文化に接して順応して、2世3世とでき、一度きりの人生に精一杯生きた。平凡な幸せが一番良いと思う。

Q5. 日本・日本人への対応はどうか。

・日本人は働き者で正直だと評価され、日本人というだけで信用される。

・親日家の方が多いが、土地なし農民などから反発をかうことがある。しかし、パラグアイではいつも日本人であることに誇りを持ってもらえる。

・日系移住者は経済的貢献度から、かなり評価されている。
・日本は経済大国で裕福な国、いろいろと援助を惜しみな

く協力してくれる国。

・日系人は勤勉で、真面目と思われてきたが、最近では多少遠ってきた風情が見られる。

・移住当初の移住者の苦勞を理解しない。低所得者の中に反感を抱く者もある。

・32年間ドイツ系の大統領の独裁で親日家で対日感情はよいし、日本からの援助で道路ができたり、電気も入り私たちも感謝している。

Q6. バラグアイと日本ではどちらが住みやすいですか。(選択)

バラグアイ 12

日本 1

「バラグアイ」

・人口がすくなく、日本のような競争社会でないで、時間的な自由がある。

・自分の考えで生活(行動)することができるし、子供たちもそれぞれの個性に応じた生き方ができること。

・初めは本当に苦しい生活で、なぜ子供たちを連れてきたのかと涙に暮れました。風雪の嵐に耐えて頑張ってきた現在は、のんびりとした生活ができるようになりました。

・生活の苦しかった移住当初より10年間ぐらひは、帰国を考へることもあったが、何とか生活も安定し、子供たちも成長した今は、自分たちの土地も家もあり、生活習慣にも慣れ、地域の人たちと助け合って生きていけるバラグアイが住みやすいように思う。

・有り余るほどの時間と暇がある。作付けと収穫以外は毎日日曜日。多分、日本の農業という感覚からは想像できない(機械化、殺虫、除草剤の恩恵)。

・経済的に恵まれたらもっとも住みよいと思うが、お金に代えられないものが総合的に感じ取られる。人間の欲、特に金銭欲には限りがないと思うし、それはあつと言う間に失ってしまうものであるから、それほどは望まない。

・後進国。自然の中で生活。農業はとても厳しい。95%が輸入でなりたっている国。今以上の便利は必要ないと思っている。

「日本」

・文化に恵まれ子供の能力を伸ばした教育が出来る。

・生活水準が均等で良い。

・すべてが便利になっていて、生活する上では楽だろうと思う。

・人の心が失われている。日本の文化、良い所にもっと自信を持つて。

・日本は給料の比から考えると、日本でのサラリーマン生活が良いと思う。

Q7. 最後に、バラグアイに移住してから日本を客観的に見てどう思いますか。

・日本は先進国の中でも特別優等生の国で素晴らしいが、外交は下手で、国際的にみれば後進国だ。もっと国際交流を盛んにして外国を知り、また、日本の文化、芸術を知ってもらいようにしなければいけない。南米では日本を最高に評価している。日系人移住者の永年の信用、日本製品の素晴らしさ、日本政府の援助(経済)などがまざるの評価だと思ふ。

・日本は年金の保障等があつて老後が安定している。年金をもらっている人は利子で生活している人もいる。アスンシオン市に福祉施設が着工されていると聞くが、老齢の方たち全部に恩恵があることが望ましい(日本老人経連からの援助もあつたと聞き、温かい気持ちが増す)。また、総連からの人たちの交歓会があるのと聞いている。日本は非常に景色も良く、環境は申し分ない。成田の上空で日本の美しさ、文化を空から痛感する。条件が揃えば日本で生活したいと思う。南米は土地が赤く粘土質を帯びているので、黒い土を入植した当時夢に見た。風があると赤く埃が舞い、汚れやすく、日本が懐かしくてたまらなかつた(都会はアスファルトだが)。

・日本はもっと、世界にはいろいろな考え方を持ったいろいろな人がいることを学ぶべきだと思う。日本だけが世界ではない。お金もうけできない仕事、もっとできる国だと思ふ。

・外国から日本を眺めた場合、日本の人たちは、ぜいたくのため、わがもの顔で地球の資源を無駄遣いしているように思う。これは、また日本だけでなく、先進国に言えると思うが…? 先進国の人たちは病んでいる地球を見直してほしい。

・もっと近隣(アジア)諸国を重視し、大切にすべきだと思ふ。

・ODAの拡大も良いが、「金を出せば出すほど憎まれた米国」の轍を踏んでいるように思う。

・経済大国になった時、もっと国民の生活向上のための政策をなすべきだと思ふ。

・日本国民の「中流意識」は程度が低すぎると思う。

・オウム事件。日本の不況。地震。日本はどうなるのか。過去において日本は、安全な所だと思っていたけれども、危険な国のイメージが強い。

・治安の良い、物の豊かな平和な国。半面、管理社会で人、皆、一樣な不気味さを感じる。豊かな社会ほど、人の心が貧しくなるとは、大きな矛盾だけれど、日本の若者をいちばん物騒で、貧しい国にならんかの形で送り出したら(平和的なことで)日本のためにはなると思ふ。

・日本は忙しすぎる。もっと心にゆとりを持って、ゆっくり暮らすべきだと思ふ。

・日本の繁栄なくして現在の移住者の生活もなかつたと思ふ。外国に住む我々もものすごく恩恵を受けている。狭い国土に1億3000万人近くも住んでいる訳で、競争社会になるのも無理はないと思ふが、環境(気候、風土)が人間を作り上げると私は思うので、今いろいろな分野でマサツがおこっているが、互いに1年か2年、相手国に住んでみたら、相手の考えもわかるだろうかと思ふ。一言でまとめるならば、とにかくすごい国、素晴らしい国だと思ふ。

・日本は閉鎖的と思ふ。

・日本の経済成長、文化の向上は本当に素晴らしいことだと思ふ。半面、高齢化社会となり、将来を担う子供の数が減少していることは、どうかと思ふ。

・私たちが日本を離れて35年余りたつが、いつも美しい祖国日本というイメージは頭の中から少しも離れない。また、いつでもそうあつてほしいと願っている。私たちが日本に住んでいた時とは現在は大分違つてきたのではないのでしょうか。ニュースや新聞で見てもちょっと昔とは変わった感じがする。たとえ私たちは異国の地に住んでいても、いつまでも美しい国、平和な国であつてほしいと願ひ、また祈ります。

アンケート方法は現地直接依頼および郵送法。実際のアンケート内容は27項目で、日本とバラグアイの生活について、2世3世は日本をどう見ているか、戦後50年をどう捉えているかなど広範囲な内容となっている。

参考資料

「国際理解教育」 大津和子 国土社(1992年)

「外国人労働者と日本」 梶田孝道 NHKブックス 日本放送協会

「社会科教育」1993年1月号 明治図書

「海外移住」 月刊誌 国際協力事業団

「WORLD STUDIES」 学び方・教え方ハンドブック めこん社

「明日の開発教育」 水野富士夫 オール出版

取材協力

CJAN(日系ラテンアメリカ人協会)

TEL 03-3823-2407

開発教育という視点を取り入れた英語教育の試み



神奈川県立希望ヶ丘高等学校
教諭（英語） 黒澤 進（パラグアイ班）

1. はじめに — 標題の「意義」 —

〈従来の英語教育からの脱皮〉

新学習指導要領では、「外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」「言語や文化に対する関心を高める」「国際理解を深める」ということを中心目標にすえ、「聞いて」「読んで」理解し、「話して」「書いて」相手に伝えるという4技能のバランスのとれた発達を促し、英語を用いて自分の生活のことや意見を発表できる人間の育成をうたっている。

これまでのような、座学中心で文法主導型の単なる日本語を英語に置き換える和文英訳や、まるで暗号を解読するような英文読解・解釈というやりかたから、「自己の考えをいかに英語で表現するか」「英文の内容を読み取ってそれについていかに自分の考えを述べるか」というように、「受信型」から「発信型」へと教員の側も生徒の側も意識変革を求められ、従来取ってきた教授法や授業を受ける姿勢そのものの変革を迫られているのが現状である。

従って、教科書で取り扱う内容も変化し

てきており、従来大半を占めていた英語圏の人々のくらしの紹介や、英米文学に類する文学作品の鑑賞ばかりではなく、われわれのごく身近な生活の中で起きている社会的な問題や、地球的規模で人類が直面している問題へと移ってきている。

すなわち、環境問題、民族問題、障害者問題、人権問題、科学の問題、異文化の問題など多様な題材が新しい視点で取り扱われ、それらを通して生徒が自分自身の足元から世界・社会・人々との密接な結びつきを感じ、そこで起きている種々の問題に対して、自らどのように関わっていったらよいかを、自分自身の日常生活と関連させて考える内容になっている。

このような新しい視点こそまさに開発教育の視点と合致するところであり、開発教育の視点で英語教育を行う意義が存在する、と同時に、何故、何のために英語を学び、何に役立たせるべきなのかという根本的な疑問に対する回答を見だし得るであろう。

2. 授業の「ねらい」および期待される成果

〈授業の「ねらい」〉

貧困・飢餓・環境破壊・人権抑圧など、この地球上で起こっているさまざまな問題は、日本に住む私たちの生活と無関係ではない。私たちとしてはこれらの問題にどのように関わっていったらよいのであろうか。それにはまずこれらが(1)人類共通の課題であるという認識を持つこと、(2)開発途上国における開発が、低開発のままにおかれている現状を正確に理解すること、(3)世界の国々がいかに相互依存および密接な関係にあるかを理解すること、(4)これらの問題の原因が途上国内ばかりでなく、先進工業諸国の中にも同時に存在することに気づくこと、(5)問題に気づいたらその解決に向けて自分としてどう関わっていったらよいかを考えること、以上のような問題解決に向けてすすんで参加しようとする関心や態度を養うところに「ねらい」と「本質」があるといえる。

〈期待される成果〉

今回の授業を通して、(1)当然のことであるが、日本がアジアの一員であることを再認識し、(2)自分の現在の日々の生活が特に途上国の人々の生活との関連を抜きにしては存在しえないということに気づき、(3)そこに存在する生活格差がどこから生じるのかを自分の生活と関連させてとらえ、(4)そして、自分なりにその解決に向けて何ができるのか、ということについて複眼的視点で広い視野からとらえることができるようになること、また、ここにこそ

何故英語を学ぶのか、何故英語を学ぶ必要があるのか、という根本的な疑問に対する回答を見いだし得ることが期待される。

3. Teaching Plan

Subjects : "Oral Communication B", "English II"
Classes : 10th grade (3 classes), 20 boys and 20 girls each class, 11th grade (3 classes), 20 boys and 20 girls each class.

*General Aims of this Lesson:

日本は地理的關係としては確かにアジアに位置しているけれども、そこに住む日本人一人一人の意識としては、はたしてどちらを向いているのであろうか。しっかりとアジアに根をはり、多くの国々から信頼される国となっているのであろうか。日本が世界の中で果たす役割が今求められていると言えよう。だが実際は、先進国から途上国を、上から下を見るような目で、あるいはそのような目でしか見られない、見ようとならない日本人の姿をかいま見ることができないだろうか。もしそうであるとすると、その奢った姿勢はどこからきて、またどう正したらよいのであろうか、そして、対等な立場で物事をわけ隔てなくとらえる見方はどう形成されるのであろうか。地球上にはいろいろな国、民族があり、それぞれ考え方が異なり、対立しあってきたし、また現在も対立しつづけているが、同時に、地球的規模で起きている問題が現として存在しており、それらが人類に与える影響はますます深刻化してきているため、今まさにわれわれとしては、これらの問題にどう取り組んでいくか、また取り組んでいかなければならないのかということが緊急に求められていると言えよう。そのように考えるとき、世界の中で果たすべき日本の役割、われわれ一人一人がやれること、やらなければならないこと、また英語が国際理解・国際貢献をしていく上で果たす意義を、自分自身のこととして考えるところに、「ねらい」が存在する。

*Special Aims of each Period (Allotments of 3 Classes):

(1)The First Period:

1) 導入に、私がパラグアイで購入してきた音楽のテープを流す。パラグアイの伝統的民族楽器である“ARPA”の独特な音色が教室中に流れ、今日の授業の雰囲気をかもしだす。おそらくかつてだれもパラグアイの音楽を聞いたことがないだろうから、初めてパラグアイの音楽を聞いてどのような感想を持ったか聞いてみる。音楽の世界にも、もしかしたら生徒が日頃慣れ親しんでいる欧米の

音楽と比べて、差別・偏見があるかもしれない。
2) 白地図にパラグアイの国を書かせることによって、世界の中での地理的位置関係を正確に理解させる。何も見ないで正確に書ける生徒はほとんどいないと思われるが、この作業を通して、自分が今までいかに無関心だったかを気づかせる。

3) 何も予備知識を与えないまま、パラグアイと聞いてまず頭に浮かぶもの、ひらめいたものを素直に紙に書いてもらう。そこにはいかに誤解と偏見に満ちた知識が多いことか、生徒に気づかせる。
4) 不正確なこと、あるいは明らかに間違っただけのことを書いた生徒に対して、それはどこから来るのか、考えさせる。欧米のことについては多少知識はあってもパラグアイとなると手も足も出ない自分は何なのか。また、もしわれわれの住む日本が他の国から間違っただけで理解されているとしたらどのような気持ちがあるか、生徒同士で意見交換させる。日本を取り巻くマスメディアの報道の仕方にも問題があるのかもしれない。現にニュース性のないものはなかなかわれわれの耳・目に入らないのが現状である。結局、国際理解はまず相手のことを正確に知ること、知ろうとすることから始まるのではないかということ、すなわち、知ろうとしない限り何も始まらないということを感じさせる。

5) 40人を8グループに分け、パラグアイについて授業中および放課後を使い調べさせる。その際、日本語で書かれた文献だけに頼るのではなく、できるだけ英語の文献にもあたらせる。必要に応じてこちらから英語あるいは日本語の文献を紹介する。パラグアイのことを調べていけばいくほどいかに日本との結び付きが深いかがわかってきて驚かされる。

(2) The Second Period:

1) 各グループが調べてきたデータをみんなの前で発表する。その際、メンバー全員で分担し、できるところで英語で発表する。Presentationの最後にパラグアイに関する質問を英語で行う。

2) その質問に対し、各グループ内で話し合い、代表者が英語で答える。そして生徒同士のInteractionを行う。

3) 実際に現地へ行って収集し、帰国後私が一つにまとめた資料を生徒に配布して、一層正確な理解を助ける。例えば、地理・歴史・言語・民族・財政・金融・風俗習慣・教育・日系人移住地、ODAの援助による施設、パラグアイと日本との密接な関係、パラグアイで起きている環境問題、日本のODAの現状と問題点、日本の国際協力のありかたなどに関するデータである。

4) 実際に現地へ行き撮ってきたVTRを観せることによって、プリントされた資料からでは得られない、映像からくる映像ならではのものを学ぶ。映像の持つ絶大な力を有効に活用できれば、その効果ははかりしれない。

5) 最後に改めて、パラグアイについて最初に自

分が書いた文章と照らし合わせ、以前自分が描いていたパラグアイのイメージがどのくらい変化したか、あるいはあまり変化しなかったかを紙に書いてもらい、認識の変化を自己確認する。

6) 先進国の一員としての日本が果たすべき途上国に対する援助は、どうあるべきか、あるいはどうあってはならないかについて、用紙に率直に書いてもらい、相互に意見交換を行う。

7) 地球的規模で生じている問題について、自分なりにどのように関わっていったらよいか、意見交換を行う。

8) 英語という言語が、考え方、あるいは使い方の一つで有効な国際貢献の手段となり得るかどうかが、意見交換を行う。

(3) The Third Period:

Teaching Plan

I Date: Monday, November 6th, '95

II Time: The 3rd and 4th Periods

III Place: Social Studies Room

IV Class: 11th grade (205), 20 boys, 20 girls

V Materials: Data on Paraguay

VI General Aims of this lesson: see page 17

VII Special Aims :

(1) Our planet is divided into industrialized countries such as the U. S. A., the EU states and Japan have a much higher standard of living compared to the countries of Latin America, Africa or Asia. There are many ways of explaining this difference, but it is certain that the gap between rich and poor is maintained and even made wider by a world trading system that helps the strong, well-organized countries rather than the poorer ones. This lesson attempts to show how trading actually works or how the countries have close relationships to each other: who benefits and who loses, or who has the political, economical, cultural, informational control power. It can only provide a simple outline of some very complex relationships. But one of the aims of this simulation is to make clear the basic issues of developing countries; poverty, environmental problems, fundamental human rights issues etc that determine these relationships.

(2) To point out the injustice in the structure of world trade, and the difficulties of arriving at a just system of exchange between the resource-owning, developing countries and the technology-owning, advanced industrialized countries, and also the decisions affecting the people's livelihood in developing countries made mainly by western commercial interests as well as people's attitudes towards pursuing wealth in advanced countries.

(3) To move away from thinking about the way the world is and to move, towards thinking about the way the world ought to be, and also what sort of attitude to

have towards the world's resources and the use we make of them for the good of the whole world in terms of a new value system.

VIII Teaching Procedure:

	Activities		Points in instruction
	Teacher	Students	
1) Greeting, Roll Calling. (2min)	Greet the students in English.	Respond to the Teacher in English	To make a good learning atmosphere in which to try to communicate in English.
2) Division of groups (3min)	Have the students divide into 8 groups of 4 to 5 members each.	Make 8 groups of 4 to 5 members each.	To make mixed groups of boy and girl students.
3) Arrangements, Explanations of activities (5min)	*Pass out a set of materials which includes necessary equipment for each group. *Explain the objectives and the four rules to the students.	*Allocation of each group. *Reconfirm of the basic knowledge of developing countries and relationships among them.	To keep control of the entire activity, taking notes of how it develops and occasionally changing the activity's direction by introducing new elements into it.
4) Activities (25min)	To encourage them to trade actively, the teacher may have to feed in more information and create new situations which have	Move around the room and begin trading; the initiative should come from students and not from the teacher. The aim at	Not to point out to the groups that students are receiving different sets of materials.

	parallels the real world.	each group is to make as much money for itself as possible by using the materials which can be used during the exchange between each group.	They will notice soon enough. To resist all temptation to answer any kind of questions, just repeat the rules or remain silent.
5) Discussion, Presentations (25min)		A few points on discussion as follows: * (1)	A few points as follows: * (2)
6) Consolidation (10min)	Comment on each group's presentation.	Assign homework dealing with the knowledge gained as a result of their groups' simulation.	
7) End (1min)	Encourage the students to take the knowledge gained today to heart.	Say farewell to each other in English.	

* (1) How did the students feel about being rich or poor? (to recall incidents that occurred in the simulation and to discuss their reactions to what had happened)

Why isn't it fair? (eg. by getting students to look at how the resources and technology were distributed at the start.)

The questions of injustices in the structures of the world's trade.

The questions of ownership and control; that is, for example, it was unreasonable for other groups to control all the technology.

Who owns the world's resources, and what right have certain nation-states to declare resources to be their property?

The questions of the way the world is and also the way the world ought to be.

What nations have the right to dictate terms to the rest of the world?

The questions of our moral attitude towards our wealth in advanced countries.

What sort of attitude should we have towards the world's resources and the use we make of them if the

world is an unfair place, and if we admit that its structures need changing?

* (2) The feelings of unfairness that will undoubtedly have been aroused in some of the groups ought to provide a useful jumping-off point for discussion.

The student's own experiences of helplessness, anger and frustration (!) illustrate the sentiments felt on a worldwide scale by many of the Third World nations in the face of western controlling interests.

If the students all agree that the world need changing, then they ought to be brought face to face with the admission that in a finite world someone has to give up something for someone else to have more.

4. 授業から見えてきたもの

(1) 授業前と授業後のパラグアイに対して変わったこと (生徒の感想から)

1学年・2学年合わせて6クラス分、約240名に対し、「パラグアイについてどのようなイメージを持っているか」を1時間目の授業の中で率直に書いてもらったところ、〈表1〉のような結果になった。そもそもパラグアイについてこれまで聞いたことがない、世界白地図に正確にパラグアイの位置を書けない者が多く、予備知識がほ

〈表1〉1時間目の授業で聞いたパラグアイに対するイメージ

	プラスイメージ		マイナスイメージ	
	人数	代表的な意見	人数	代表的な意見
自然と人間	74	自然が多い。南国。高い山、大きな河。海に囲まれている島。	62	暑い。黒人がいる。多民族。田舎。
生活一般	63	陽気。サッカー。平和。農業が盛ん(コーヒー豆などを作っている)。	46	文明が発達していない。治安が悪い。戦争。飢餓。病気が流行。工業は発達していない。
その他	3	アマリージャ(サッカー選手)。	4	あやしげ。日本とは縁がない。
計	140		112	

とんどないため、このような内容になったように思われる。英語科教員11名に同じ質問を試みたが、ほとんど同じような内容であったので、かれらの書いてくれたことが必ずしも特殊なことだとは思われない。

例えば、教員が書いてくれたものの中には、「パラグアイの名前は聞いたことがあるけれど、何も知らない」「とにかく苦勞して生活している人たちではないかと思う。本当のところはわからないが、高い山々のあちこちに(私たちから言うと)ほったて小屋程度のものを建てて、生活に必要な物を買に行くのでさえ、山を下って1日かかり、というような……」というのもあれば、「日本の海外協力の相手国として何度か耳にした」「日系人の開拓者が多い」というのもあった。しかし、2時間目の授業の中でパラグアイに対するイメージを改めて問うたところ、かつて自分が抱いていたイメージが一新し、今までの自分の姿勢が恥ずかしいという者まで現れた。生徒の率直な感想をまとめたものが〈表2〉である。教員が述べた中には、「自分の世界観がいかに歪んでいるか再認識した」「小学校の留年・退学率が高い一方、学校へ行けることの嬉しさ、誇らしさがあることを知って、この国の認識を深めてくれた」「いい勉強になった。もっとこの国に対する意識を高め、認識を深めなければならないと思った」というのがある一方で、「日本は何を目的として援助しているのかよくわからない」という意見もあった。

このように授業を通して、生徒が、パラグアイというのは確かに地理的には日本の

(表2) 2時間目の授業で聞いたパラグアイに対するイメージ

	プラスイメージ		マイナスイメージ	
	人数	代表的な意見	人数	代表的な意見
自然と人間	8	季節があることがわかった。 自然が多い。	3	遠い国
生活一般	168	治安がいい。交通量が多い。近代的。平和。人々が温かい。楽しそう。工業が発達している。水力発電がすごい。	35	お金がなくて教科書が買えない。小学校でも留年がある。学校を留年してしまう理由がかわいそう。義務教育がないことにびっくり。
その他	86	日本と密接な関係がある。日本語を話せる人がいる。	1	あまり特徴がない国。
計	262		39	

反対側（「裏側」という言い方は地元の人たちが嫌っていた）に位置し、馴染みもなく、何か遠い存在に感じられ、自分とは関係ない国と思っていた自分から、日本といかに密接な関係があり、相互依存の関係にあるかがわかり、パラグアイに対しいかに対等な立場で援助すべきなのか、かれらの抱えている問題が、実は日本に住むわれわれの生活と密接な関わりがあり、しばしばその原因がわれわれ自身の生活の中に存在するのだ、ということに気づいた自分を発見したことは、この授業の一つの成果といえるであろう。

このことは、私が第2章で指摘した本授業の「ねらい」あるいは「期待される成果」の一つが達成されたと考え、「正しい情報・知識・理解がないところに誤解・偏見・差別が生じるのではないか」、このように述べた生徒の言葉は今も私の心に残っている。

(2) 「南北問題」が訴えていること（生徒の意見から）

3時限目の授業では、「貿易シミュレーション」を通じた生徒の「南北問題」に対する意識に着目し、授業を展開している。このSimulationは、各Groupが地球上の先進国（A・B）、中進国（C・D・E）、途上国（F・G・H）を代表しており、各国間の貿易や関わり具合を体験することができるというものである。Activitiesの結果、気づいたこととして以下のことが挙げられる。

(1) 先進国と途上国との間の不公正な関係 Unfair relationships の存在。例えば、それを使うと価値が4倍になるという金色のシールを持っていても、その情報を知らなかったために使えなかったり、また、「新資源」を表し、国際市場で5割増しの価格で売れる価値を持つ “Blue sheets of paper” を持っていたにもかかわらず、その価値を知らなかったために、価値を知っていた先進国に不当に持っていかれてしまったことなどは、現実を反映したものである。例えば、アフリカのザンビアにおいて、新たに銅が発見されても、当時の人々にはその価値がわからないまま、1964年の独立までイギリスが銅を不当に搾取し莫大な利益を得た、という歴史上の事実は、このことを雄弁に物語っている。

(2) 国際援助のありかた（日本のODA）の問題。例えば、途上国のグループのある生徒が言った、「お金よりも技術に相当するハサミや定規を援助して欲しかった」という発言は、技術援助、人材派遣の重要性を訴えていることにほかならない。つまり、

先進国は、途上国が将来自立できるような技術援助・人材派遣などを行い、本当に援助を必要としている底辺の人たちまで行き渡るようにすべきである、ということを示唆している。

(3) 環境問題。Activities終了後、自分たちの机の上に大量の紙屑が残されていたが、それは何を意味するのか。たくさんの紙屑を見てある生徒が次のように言っていたが、大変貴重な指摘であると言えるであろう。つまり、「有限な資源が大量生産、大量消費、大量廃棄というメカニズムのもとでかなり無駄に浪費されていることに気づき、改めて自分自身の日頃の生活を見直す良いきっかけになった」。また、「日本はパラグアイから大豆、綿花、木材などを輸入しているが、われわれはもう少し作っている人たちのことを考え、無駄のないよう大切に使わなければならない」という指摘は、今後われわれが環境問題を考えていくうえで堅持していかなければならない一つの心構えを示しているといえよう。

(4) 国際貢献における英語の重要性。「国際貢献をしていくうえで、英語がいかに有効かつ必要なものであるかということ、このSimulationを通して広い視野からとらえることができるようになった」。また、「言葉の壁を取り払い、心と心で意思の疎通をはかり、共に協力して共通の問題（貧困・環境破壊・人権など）に立ち向かっていくうえで英語は必要不可欠であることを改めて実感させられた」。以上のように生徒の発言を見てくると、私が第2章で指摘した本授業の「ねらい」や「期待される成果」が、授業を通して達成されたといえる

であろう。

(3)日本の国際協力が問われているもの (生徒からの提言)

2時限目および3時限目の授業の中で、第1・2学年約240名の生徒に、A：パラグアイと日本との経済格差はどこから生じるのか、B：日本の国際協力はいかにあるべきか、さらに、C：自分として今後問題解決に向けてどう関わっていったらよいのか、について率直に語ってもらった。私が第2章で指摘した本授業の「ねらい」および「期待される成果」がどのくらい達成されたであろうか。

A：経済格差の問題については、長期間にわたる植民地支配、つまり、宗主国による富の収奪が途上国を依然として低開発のままの状態に置いてきたところに根本原因がある。政治的に独立を達成した後も、大土地所有制度（パラグアイの場合、1000ha以上を所有する農業人口の約1%の大規模農場主が、約77%の農地を所有し、20ha以下を所有し農業人口の約80%を占める小農が、約6%の農地しか所有していない）とモノカルチャー経済（大豆、綿花etc.のような単一商品の輸出）が障害となって、自国内での自立した経済発展を困難にしており、依然として先進工業諸国の動向に左右される脆弱な経済構造を形成している。B：このような状態の中であって、日本の国際協力はいかにあるべきかということについて、生徒の提言をいくつか挙げると次のようになる。

*環境破壊、公害問題、人権問題など、日本がかつて経験したことを教訓として、途上国のバランスのとれた国造りの中にうまく生かしていく（バラグアイでも大規模な森林伐採による環境破壊が大きな問題として日経ジャーナルに報じられていた）。

*日本からの資金援助の額がまだ多いとはいえないので、有償資金援助ではなく、無償資金援助の額をもっと増やし、それとともに人材派遣、技術援助を通して途上国が自立できるような援助をしていく。

これらの提言は、今後の援助のありかたを考えるうえで決して無視することができない内容を含んでいると言えます。

C：では一体問題解決に向けて自分自身どう関わっていくのか、ということについて、その代表的なものを挙げると次のようになる。

*途上国が抱えている問題が同時にわれわれ日本人の問題でもあるという認識に立ち、われわれの日々の生活を見直す。例えば、資源を大切にし、無駄に浪費しない。生産者も消費者も不必要な物は造らない、買わない。ゴミ問題を考慮した環境に優しいリサイクル活動など。

*もっと一人一人が「地球を守る」ことを意識しなければならない。リサイクルや再利用を当然と思える世の中になるのはいつのことだろう。リサイクルや再利用を「手間」だと思わなくなった時に地球は救われるのだと思う。一人一人の心がけで未来は変わっていく。

*わたしたちは「もっと新しく、もっと便利なもの」を常に追求している。この贅沢な考え方が多くの犠牲を生んでいる。今まで私たちに衣・食・住を与えてくれた自然に感謝すべきである。

*わたしたちができることは、現在日本で教育を受けられているのでバラグアイの人たちの分まで勉強し、もっと深く格差の原因について学び、そして解決策を導き出すこと。今は深くまではわかっていないのもっと理解することだと思う。

*わたしは、今まで途上国について「かわいそう」とか「ひどい」とか見下すつもりはなかったけれど、まちがった見方をしていたと思います。決してそれが自分には関係のないことではないと思い直しました。将来役に立つことができるようもっと世界の状況を知って勉強していきたいと思っています。そしてもっと違った幸せを味わいたいと思います。

*知識は身につけても使う機会がなければ本当

の意味で役だったとは言えません。今の日本の教育はまさに知識の詰め込みが多いと言えるでしょう。知識ばかりでそれを生かすことができない、生かす場所を知らないのはあまりにも残念です。今わたしにできることと言えば、たくさんものを実際に見て、たくさんの人と会ってお互い理解し合い、たくさんのかんことを許せる、そういう視野の広さ、心の広さを身につけることだと思います。学生のうちにいろいろなものを吸収しておくべきだと思うのです。異なるものでも認められる心の広さがあれば、差別はなくなり、利益と損失にこだわらなくなるようになるでしょう。わたしはもっといろいろな人の考えを聞くべきだと思うし、逆から言えば、わたしにそれらの異なる文化を受け止められるほどの広い心と視野を持つことを要求されているのだと思います。

いずれも、素直な気持ちが表れており、生徒のまじめな性格が伝わってきて、好感が持てる。

5. おわりに

このように見てくると、生徒一人一人が今までの自分とどこか異なる別の自分というものを、この授業を通して発見したのではないかと思う。そこにはただ自分の目先の利益だけを求める姿勢から、広い視野で他との関係の中で自分自身を見つめることのできる人間、さらに他人の苦しみをどうしたら解決できるのか一緒になって考え、行動できる人間へと大きく変化した自分というものを発見したことだろう。そして、地球上のあらゆる人たちとこれからつきあっていく上で、外国語特に英語の重要性を強く認識し、自身の目的意識が鮮明になるにつれて、日々の勉強にも意欲的に取り組む姿勢が形成されてきたように思われる。これこそ、まさにわたしが今回の授業の「ねらい」としたところであり、期待して

いた成果であった。その意味で私の本授業の「ねらい」としていたことが達成し得たものと考えて。生徒から今回の授業をやってよかったという声が寄せられ、私自身本当にやってよかったと思っている次第である。また、日頃一方的な知識の伝達になりがちな授業から、生徒が「主役」になり、自ら「参加」し、ことの本質を体験的につかみ、さらに英語を武器として能動的に地球的規模の問題に関わっていくという関心、態度の育成を主眼とする授業へと、英語教育の中身を変革していこうとする時に、開発教育の視点がいかに有効であるか、改めて実感した次第である。

なお、本授業は、神奈川テレビ制作部(TVK)の取材を受け、神奈川県県民部広報課主催の番組「県政フラッシュ」において取り上げられ、放映された。(1995年11月20日)

6. Questions on Paraguay in 2nd Term Mid-Term Examination of 'Oral Communication B', '95

1学年3クラス約120名を対象に、1995年10月中旬に行われた2学期中間試験にパラグアイに関する問題を出題した。形式は、私がこの夏パラグアイで学んできたことを英文のDialogueにし、ALT (Assistant Language Teacher) のアメリカ人と一緒にテープに吹き込み、当日Listening Comprehension Testという形で出題した。このテストのねらいは、パラグアイについてこれまで学習したことをどれだけ正しく理解しているか、ということばかりではなく、英語の力が国際理解・国際貢献をしていくうえで、さらに自己の自立のためにいかに有効でか

つ必要不可欠であるかを再確認するところにある。このことは、同時に私が第2章で指摘した本授業の「ねらい」や「期待される成果」がいかに達成されたかを見る一つの試金石でもあろう。このテストの結果は予想していた以上に良く、私自身驚いていると同時に、このことを契機に、英語を学ぶ動機や目的が、途上国の人たちとの連帯を視野に入れたものによって変わって欲しいと思うし、現にその方向に進む生徒が少しずつ出てきていることも事実であるので、今後が大いに期待される場所である。実際に出題された問題は次のとおりである。

Second-Term, Mid-Term, Examination of Oral Communication B

DialogueとQuestionが2回読まれます。適する答えを選択肢の中から1つ選んでその記号をAnswer Sheetに書きなさい。途中必要に応じてメモをとるとよいでしょう。それでは始めます。

(D: Ms. Disa, ALT, American, K: Mr. Kurosawa, Teacher of English)

D: Hello, how are you doing, Mr. Kurosawa?

K: Pretty good! How about you, Disa?

D: I'm O. K. By the way, I heard you went to a foreign country this summer vacation. Where did you go?

K: How did you know that? I went to Paraguay in South America.

D: I've never been to South America, but I visited Mexico in Latin America a couple of years ago.

K: Oh! Really? I got a different impression from Paraguay. The streets were not so dirty and there were almost no street children. Nor were there so many children selling souvenirs and working by washing the front windows of cars, etc.

D: In Mexico there are many street children who are homeless. This is just one of many social problems there. Well, let me ask you some questions, if you don't mind.

K: Sure, go ahead.

D: What's the time difference between Japan and Paraguay?

K: Paraguay's 13 hours behind.

D: What country colonized Paraguay?

K: Spain did. Therefore, Spanish is the official language now.

D: How about the mother language? Is there one?

K: It's the Guarani language which is the language of the native Paraguayans, Guarani Tribes. And the name of the currency unit is Guarani. And also the Guarani language is a compulsory subject for elementary, junior, and senior high school students.

D: Oh, how interesting! The Paraguayan Government protects the native tribes in many ways, doesn't it?

K: Yes, that's right. This surprised me very much.

When I visited a high school, some students were able to communicate each other in the Guarani language. The Guarani people make up only a small number of the total population. People who are descended from the Spanish and the Guarani are called "Mestizo", and they make up about 96 percent of the total

D: I see. The next question is what is the population of Paraguay?

K: About 4.5 million people. Yokohama has about 3.3 million people. So Paraguay has a much smaller population in comparison, doesn't it?

D: How about per acre? and which is larger, Japan or Paraguay?

K: Paraguay is larger than Japan. Paraguay is about 400,000 square kilometers, So it is about 1.1 times as large as Japan. Japan is only about 380,000 square kilometers.

D: I see. The next question concerns education. How many years are compulsory and what kind of problems are there in schools?

K: 6 years is compulsory. But it will be changed to 9 years in a few years time. And one problem in education, for example, is that the graduation ratio for elementary pupils is very low, only 37.3%, and 22.2% for junior high school, 8.6% for senior high school. And the ratio of leaving school is about 55%, 21% is the ratio of repeating the same year for elementary pupils. Other problems include bullying, particularly for Japanese-paraguayan students by other Paraguayan students. Surprisingly enough, Japan also has a problem with bullying in school.

D: Another question is, Are there a lot of Japanese immigrants in Paraguay?

K: Yes, of course. That is the same in other countries in South America, too, like Brazil, Argentina, Peru etc. Immigration started in 1936 and there are about 8,000 Japanese people living in Paraguay now. About 5,000 of them are working in agriculture, they try to improve or develop the breed of the plants they grow many times and also the way of cultivation which is called Fukookisaibai, no-tilled cultivation. And Japan is a close trading partner of Paraguay which is the fourth most important countries in 1991. Japan always has a deficit trading balance with Paraguay.

D: I see. Does the Japanese Government support them to cultivate the land and live in Paraguay as well as give money to the Paraguayan Government?

K: Yes, the Japanese government assists the Paraguayan Government in three ways: (1) with loans (2) with grants, and (3) with technical assistance, which is called ODA (Official Development Assistance). The Japanese government has given about 10 billion dollars all together since 1959 to construct infrastructures, schools, bridges, roads etc, to receive many Paraguayan experts here and to dispatch many Japanese specialists there etc. To tell you the truth, it is said there are some problems with ODA. For example, even though the Japanese Government spent a lot of money, how is this money utilized particularly for the lower class people who really, actually need it for assistance. Because there still remains the issue of poverty.

By the way, let me ask you a question, Disa. How should the Japanese Government contribute internationally to developing countries?

D: Because I was not an Economics major in college, I can't give you a detailed answer. The only suggestion I have is to donate money to non-profit organizations, such as the Red Cross. These organizations can then distribute the money to people who need it through medical and educational services.

Dialogueはこれで終わりです。次に問題が読まれます。では始めます。

Questions:

(1) Where did Mr. Kurosawa go on his summer vacation?

1. Paraguay 2. Mexico 3. Brazil

(2) Where is Paraguay located?

1. Africa 2. South America 3. North America

(3) What is the time difference between Paraguay and Japan?

1. Japan is 13 hours behind.
2. Paraguay is 13 hours behind.
3. Paraguay is 13 hours ahead.

(4) What country colonized Paraguay?

1. Japan 2. America 3. Spain

(5) What is the original native language of Paraguay?

1. Spanish 2. Guarani 3. English

(6) What is the population of Paraguay?

1. about 4.5 million 2. about 3.3 million 3. about 5.5 million

(7) Which is larger in landmass?

1. Paraguay 2. Japan 3. Both Japan and Paraguay are exactly the same

(8) What year did Japanese immigration to Paraguay begin?

1. 1935 2. 1936 3. 1937

(9) What kind of problems are there in schools?

1. School Uniforms 2. Bullying 3. Suicide

(10) What other countries in South America do Japanese immigrants live in now?

1. Australia 2. Mexico 3. Brazil

(11) What method of cultivation did Japanese immigrants import from Brazil?

1. Fukookisaibai 2. kookisaibai 3. Daikibosai

(12) What is the Japanese trade balance with Paraguay?

1. Surplus 2. Deficit 3. Almost the same

(13) ODA has three ways of assisting developing countries.

What are they?

1. To give them natural resources; oil, coal, rubber etc for assistance.
2. To give them agricultural products; soybeans, wheats, vegetables etc for assistance.
3. To give them loans, grants, and technical assistance.

(14) What is ODA short for?

1. Official Development Assistance
2. Official Developing Agency
3. Organization Development Association

(15) What kind of problems does the ODA have?

1. It causes family trouble.
2. It causes conflicts among countries.
3. It is not utilized particularly for the lower class people who really, need the assistance.

沙漠を緑に！



東京都立農産高等学校

教諭（社会） 小辻俊雄（エジプト・ジョルダン班）

1. はじめに

私たちの日常生活の中に「異常気象」という言葉と、それを原因とする社会的現象が問題化ようになってから久しい。最近では一昨年の冷害による米の不作による米の緊急輸入、昨年の干ばつによるダムの取水制限が挙げられる。

その社会的現象の原因を「異常気象」として片付けられたような感じがする。しかし、日本がどんな「異常気象」に襲われたとしても、緑豊かな国土はそう簡単になくならない。

本校の校舎から眺められる公園の木々は青く繁り、本校の農場では季節季節の野菜が育ち、多くの草花が咲き乱れている。

物の豊かさに慣れてしまった私たち日本人にとって、過酷な自然条件の中で生活している人々のことは余りにも遠い国の話である。

しかし、これからの日本の行く末を考えた場合、少しでもそのような条件で生活する人々のことを知ることは、とても大切なことと考える。

2. 授業実践にあたって

この授業実践は、地理B（3単位）の1年生園芸デザイン科2クラスで行ったものである。

授業計画

- 1時限目「『飽食の国』、日本」
食糧自給率と飢え、人口爆発
- 2時限目「沙漠を農地に」
塩類集積との闘い
- 3時限目「水を得るために」
灌漑方法について
- 4時限目「沙漠は不毛な地ではない」
沙漠で耕地拡大に成功
- 5時限目「沙漠は友達」
沙漠は死の世界ではない
- 6時限目「沙漠は農業に最適の地だ」
沙漠気候と水の確保について
- 7時限目「沙漠で活かされる技術と知恵」
保水材や遮光について

例年、ユニセフなどの資料を用いながら、開発途上国の子供たちの生活の様子や地球



カイロ～アレキサンドリア間の沙漠道路

規模で起こっている環境破壊などを取り扱ってきた。今回の高校教師海外研修で得たものは多くあった。その中でも、エジプトで現在取り組んでいる沙漠¹⁾の緑地化を参考にして授業をした。

エジプトを代表する2大都市である首都カイロと地中海に面するアレキサンドリアを結ぶ幹線道路は2つある。その一つである沙漠道路は、荒涼とした広大な沙漠の中を走ってはいるが、その周囲を中心に緑の耕作地が広がりつつある様子を見ることができた。

基本的な資料は、沙漠道路から撮った写真や漫画「ひろがれ 緑の大地」(三枝義浩著、講談社¹²⁾)などを使用した。この漫画は、メキシコの沙漠でメロン栽培に取り組んだ、という実話に基づいたものである。

3. ひろがれ緑の大地

(1) “飽食”の国、日本

入学してから今までに、農業実習などの

授業の中でいくつかの農作物や草花の栽培や収穫をしてきている。収穫した時の喜びの表情、収穫物を家に持ち帰った時に弾む家族との会話は、生徒本人や実習担当の先生、保護者からよく聞く。東京という大都会にありながら農業高校として存続しているという確信はここにあるように思う。生徒は、必然的に農業問題や食糧問題については関心が高い。

スーパーなどにはさまざまな農産物が売られ、食卓にも多くの食品がのぼる。しかし、「主な国の食糧自給率」の表を見ることで、日本の食糧自給率が先進国の中で極端に低く、いかに多くの農産物を輸入に頼っているかがわかる。しかし、世界全体では途上国を中心に約10億人以上の人々が飢えに苦しんでいる。その原因は、干ばつなどの天災ばかりでなく内戦などによる農地の荒廃、人口爆発が挙げられる。

“飽食”の国である日本は、食糧の半分を輸入に頼っているという現実。一方、途上国では人口爆発により、森林が破壊され、

過剰な家畜の放牧と過度の耕作により沙漠が広がっているということを照らし合わせたときに、身近な問題として沙漠化のことを捉えることができる。

主な国の食糧自給率 (1988年) (%)

食料	日本 (1990年)	アメリカ 合衆国	イギリス	旧西ドイツ	フランス	イタリア
穀	30	109	105	106	222	80
食用穀物	67	182	97	113	241	79
うち小麦	15	186	99	116	249	74
粗粒穀物	2	95	117	99	203	81
いも類・でんぷん類	93	97	90	99	104	86
豆	8	123	106	27	136	57
野菜	91	97	88	40	86	122
果実	63	82	11	41	63	112
肉類	70	97	81	89	101	73
卵類	98	102	97	71	96	95
牛乳・乳製品	78	100	92	112	116	68

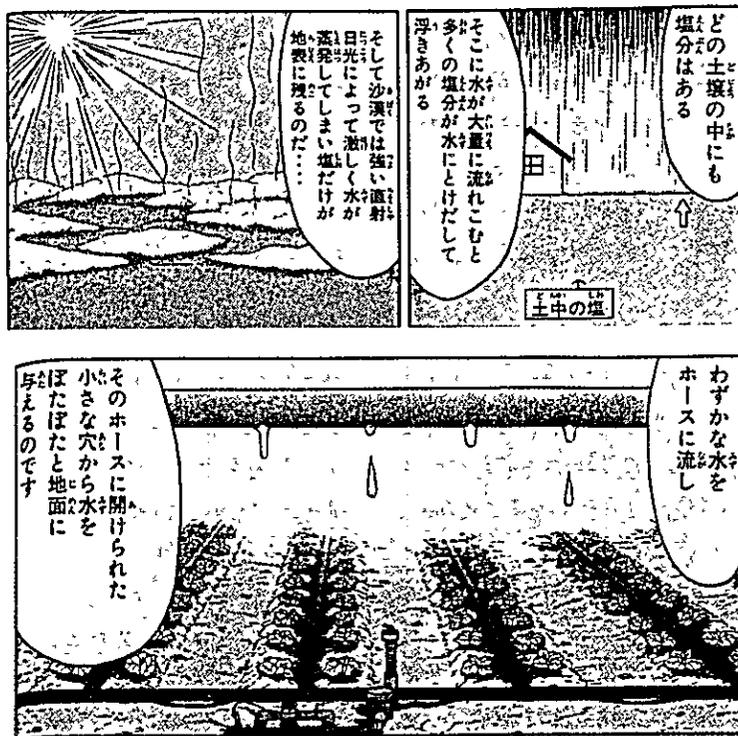
(注) 食用穀物は米・小麦・ライ麦およびその他の食用穀物の合計、粗粒穀物は大麦(日本はハダカ麦を含む)・えん麦・雑穀の合計。肉類は鯨肉を含まず。牛乳・乳製品はバターを含む。(「日本国勢図会」1994/95)

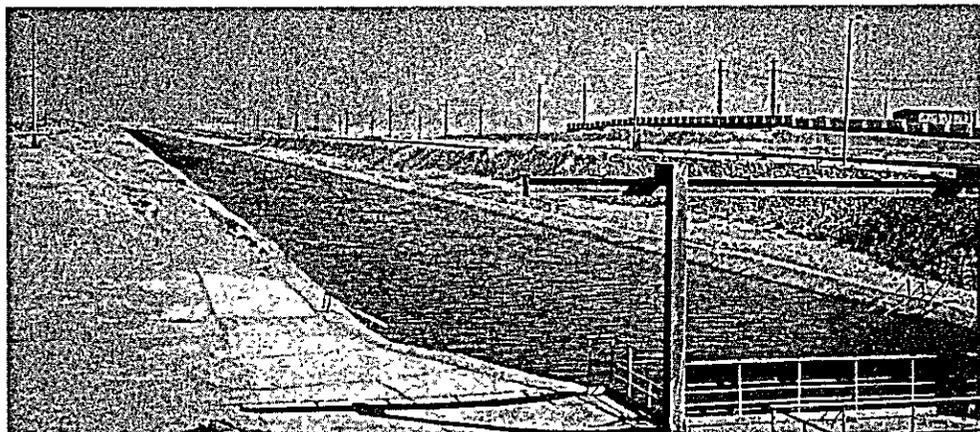
(2) 沙漠を農地に

沙漠を農地にする場合、何よりも必要な

ものは水である。その水をどのように得るのが問題である。貴重な水を沙漠に撒くのはだから成果がないといけないわけである。その意味では、住民の理解と根気強い取り組みがいる。湯水のごとく水を撒くと、塩類集積という問題が生じる。塩類集積は、大量の水を沙漠に撒くことによって、地中の塩分が毛管現象で地表に現れるものである。エジプトでは、地下水の汲み上げにより、塩類集積が発生している。

沙漠の灌漑法にはいくつかの方法がある。日本でもよく見られるスプリンクラーによる灌漑は、労働力を削減することができるが、大量の水を必要とし、風の影響を受けやすい。点滴(ドリップ)栽培は、ホースに穴を開け少量の水を植物の根本に一





ナイル川口セッタ支流の灌漑水路

定程度垂らす方法で、貴重な水を有効に使うことができる。センターピポットは、半径100mにも及ぶ円形の耕地を灌漑することができるが、多額の資金を必要とする。

そこで、エジプトの沙漠道路周辺やメキシコの沙漠では、少しの水を有効に使う点滴（ドリップ）栽培という方法が採用されている。

また、農業用水を得るための工夫も行われる。空気中の水分を除湿器で取り出す方法や海水を淡水化する方法などがある。

太陽光線のあふれる沙漠は、光の調節も大切な問題である。光を減らすさまざまな工夫が行われる。例えば、寒冷紗を使うやり方やナツメヤシなどの高木の下にオリーブを植え、その下に野菜などを栽培する日陰樹栽培が行われている。

沙漠に生きる人々は、樹木の下に石ころを置いて水分の蒸発を防いだり、水の入った大きな素焼きの壺を置いて樹木に水を染み出させたりしてきた。このように沙漠地帯では、古来から農作物の栽培においてさまざまな工夫が行われている。

(3) 沙漠は不毛な地ではない(エジプトの場合)

光あふれる沙漠を緑地化する場合、わずかの水をいかに有効に活用するかが問題となる。

エジプトの場合、ナイル川の水を新たに引くことによって耕作地の拡大を図ってきた。実際、カイロとアレキサンドリアを結ぶ沙漠道路の路肩には、点滴（ドリップ）方法により街路樹が育ち、そこを基点としてオリーブなどの果樹等の耕作地が広がっていた。また、遙かかなたにはセンターピポットのパイプラインを見ることができた。まだ活用されてはいなかったが、外国の援助による灌漑用の



サッカーラ遺跡近くの農地



RMCライスセンター

用水路には満面の水がたたえられていた。しかし、この用水路は完成はしているものの、活用はされていなかった。

沙漠の中に位置するエジプト最古のサッカーラのピラミッドは、沙漠の中に位置し、そのすぐ近くまで耕地が広がっていた。その耕地には、ナイル川から灌漑用水路が周囲に掘られており、高木のナツメヤシの下にトウモロコシが栽培されていた。

(4) ナイルデルタの灌漑

世界一長い河川であるナイル川は、外来河川である。沙漠気候（BW）のエジプトでは、ナイル川の灌漑用水によりトウモロコシや米などの穀物の他に綿花、野菜などが栽培されている。長い間、ナイル川の洪水と乾燥した気候と闘いながら、耕地を広げるための灌漑を行ってきた。

ナイルデルタでは水も労働力も豊富にあるが、農業の機械化が遅れている。恵まれ

た自然条件を最大限に利用し、農業生産を上げるために日本の援助が必要とされている。「RMCエジプト米作機械化計画プロジェクト」では、日本のODAとして農業機械の援助と農業技術の指導が行われている。その結果、ナイル川の灌漑用水と農地を計画的に高度に利用することが可能となり、食糧確保や塩類集積といった問題を防ぐなどの成果が上げられている。

4. 生徒はこう考えた

◎今はどんどん緑がなくなっていつまでも残っているし、沙漠を緑地化することはいいと思う。緑を増やすことは、沙漠だけでなく、進んでいる国々にも必要なことだと思う。

◎貧しい生活、産業を考えると、少しでも沙漠を緑地化するように動き始めてほしい。

◎この学校に入ったんだから、自分の将来何か役に立つと思う。私たちが緑地化するために、何か協力しなければならない。

◎今は、おむつの中に入っているものを取り出し、それを耕地に撒いていると農業基礎の時間に習った。水を撒くと、それが吸い込んで、水を保ってキャベツやレタスがみずみずしく育つ。点滴方法は少量の水だけが必要で塩害にもならないので、アフリカの人に教えてあげたい。

◎自分の手で植物を育て、それが大きく育つ。植物を育てるということがこんなにうれしいことだと、この高校に入って初めてわかった。私が沙漠を緑地化しようという組織に入ったら、進んでいろいろな植物や野菜を育てたい。

◎今、日本は飽食の時代である。食糧自給率が低く輸入に頼っているのだから、資金を出したり、指導者を派遣するなどしたらよい。

◎沙漠がなくなって緑が増えることはいいことだと思う。しかし、同じように森林伐採などで緑が減り、沙漠化になっているような気がする。同じことを繰り返さないように、緑地化になってからのことも考えるべきである。

5. おわりに

一般的に想像する沙漠は、砂や岩石、土に覆われ、植物も生えないような不毛な地、というイメージが強い。しかし、人間の英知と努力で、沙漠の緑地化が可能であり、農作物を栽培することができる場所である。

農業高校の生徒として植物を栽培することや農作物を取獲することは、喜びそのものである。東京という大都会にある農業高校は、農業後継者を育成するという目的を達成することはできない。しかし、農業問題や食糧問題、環境問題を考えることができる生徒を育成することができる。そして、沙漠の緑地化という遠い場所での取り組みも、身近な問題として感じ、考えることができたようだ。

注1：「沙漠」と「砂漠」

砂沙漠・土沙漠・岩石沙漠の総称として“沙”漠とした。

注2：鳥取大学の遠山正瑛氏、梶雄氏親子の沙漠を緑地化した取り組みを漫画にしたものである。

異文化コミュニケーション力の育成



沖縄県立久米島高等学校

教諭 (英語) 神里涼子 (エジプト・ジョルダン班)

1. はじめに

本校は、普通科 (学年2クラス)・園芸科 (学年1クラス) 併設の全校生徒350人余りからなる小さな学校で、来年創立50周年を迎える。久米島は沖縄本島から南西約100kmに浮かぶ島で、幸いにも50年前の激しい戦禍を逃れ美しい自然がそのまま残されている。学校は海に面しており、教室からエメラルドグリーンに輝く東シナ海と、素晴らしい夕日を見ることができる。温暖な気候と豊かな自然環境に囲まれ、生徒たちは素朴で明るく温和である。

しかし、離島のハンディとでもいおうか、久米島の子供たちにとって一番近い外国が沖縄本島といっても過言ではないほど、かれらは外との接触の経験に乏しい。私自身も久米島の出身であるが、大学へ入学するまで一度もネイティブ・スピーカーと英語で話したことなどなかった。

私たちが住んでいる世界は、かつてないほど小さくなっている。外国で起こったことが自分の国の生活に直接的、間接的に影響を与えてくるようになってきており、衣

食住をはじめ、国際政治、科学技術などあらゆる面において世界の相互依存関係が深まっている。それとともに、環境、開発、人権、平和などに関する諸問題が、世界を一つのシステムとしてとらえグローバルな視野に立って対応しない限り、克服困難となってきたのである。国際化が急速に進んでいる今日、そうした現実の世界を理解していくことは、とくに孤立した状態にある久米島の子供たちにとって時代に取り残されないためにも重要であると思われる。

2. 授業の背景

(1) 外国語における国際理解教育・開発教育

世界の民族は多様な文化を持っている。それぞれの文化は、その地域の自然や歴史的条件によって培われてきたものであり、それらの文化の違いはあっても優劣はない。異質なものに対する肯定的な見方を育成し、共通性を見いだしていくことは国際理解には必要である。

人間同士が互いに理解し合うために、コ

コミュニケーション力が不可欠であることはいうまでもない。そこで、私は英語を教えていることもあり、英語を用いて異文化コミュニケーション力の育成に重点を置いた授業をすることに決めた。つまり、英語を教える授業ではなくて、英語で生徒の国際理解を深め、異文化コミュニケーション力を育成する授業に挑戦することにした。

国際理解教育・開発教育という異文化コミュニケーション力とは、単なる外国語の習得を言うのではない。自分の考えをはっきり表現できる力、相手の思いや考え、感じていることをしっかりと理解し、それに対応して自分の思いや考え・感じたことを的確に述べる力を指すと思う。このためには、柔軟な思考力、広い視野や洞察力を持つことが必要となる。英語で、道を聞いたり、天気の話をするのもそれはそれとして良いが、それだけで果たしてコミュニケーション力があると言えるだろうか。新学習指導要領でも示されているとおり、「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを計ろうとする態度を育てるとともに、言語や外国に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」ことが大切だと思う。換言すれば、コミュニケーション力とは、単に単語による交信能力にとどまらず、きわめて広い視野をもっているといえる。

私自身、外国へ行ったことで、何が一番良かったかといえば、自分とは違う見方・生き方の存在を実感したことである。また、英語自体にもバラエティーがあり、英語はもはや英米人だけの言語ではないということにも気付いた。国際化が急速に進んでい

る現在、皆ひとつひとつでもいいから、意見を言い合い、異なるものがそれぞれのパワーを持って共存する社会をつくること、それが今後の英語教育の課題の一つではないかと私は思う。

(2) 事前アンケート

授業を始める前に、まず生徒がどの程度エジプトの知識があるかどうか、自己の英語力をどう評価しているか、事前アンケートをすることにした（資料1）。その結果生徒の70%がエジプトに特別興味があるわけではなく、55%がその位置さえも知らなかった。異文化間の理解を妨げるのも、逆に理解を促進するのも情報だと思う。そこで、私はまずエジプトに関する情報をあたえ、最終的に異文化コミュニケーション力の育成を目標とすることにした。

次に、生徒が自己の英語力をどのように評価しているかについてだが、「通じると思う」が38%で、「通じると思わない」が55%だった。「通じると思う」理由として、「ある程度の単語は知っているし、それに身振り手振りを加えればよい」「心があれば、人間だから通じる」などがあつた。「通じないと思う」理由として、「発音がやっぱり外国人と違う」「自信がない」「発音も文法もメチャクチャだから」などがあつた。これらの理由から両者の大きな違いは、英語力の差というよりもコミュニケーションしようとする姿勢にあるように思える。

<資料1>

エジプトに関する生徒の意識調査（40名）

1. あなたはエジプトに対して興味がありますか。

- a. 大変興味がある…4
 b. 興味がある…8
 c. 普通…12
 d. あまり興味がない…9
 e. 全然興味がない…7
2. エジプトがどこにあるかわかりますか。
 a. はい…18
 b. いいえ…22
3. あなたはエジプトに対してどのようなイメージをもっていますか。
 a. 大変発展した国…0
 b. どちらかといえば発展した国…5
 c. 普通…7
 d. どちらかといえば遅れた国…27
 e. 大変遅れた国…1
4. エジプトでは何語が話されていると思いますか。
 a. 英語…1
 b. アラビア語…31
 c. エジプト語…5
 d. ベルシャ語…3
5. エジプトの主要宗教は何ですか。
 a. キリスト教…0
 b. 仏教…1
 c. イスラム教…39
6. エジプトの大卒の給料は平均いくらだと思いますか。
 a. 5,000円…14
 b. 10,000円…12
 c. 50,000円…11
 d. 100,000円…2
 e. 150,000円…1
7. エジプトと聞いて連想するものを挙げなさい。
 ピラミッド、砂漠、スフィンクス、モーゼ、ミイラ、絨毯、バビルス、カイロ、ラクダ、ナイルの賜、ナイル川、ツタンカーメン、メンフィス、テロ、吉村作治、黒ずくめの女性、アラジン、クレオパトラ
8. 自分の英語は通じると思えますか。なぜそう思うのですか。
 はい…15
 いいえ…22
 無答…4
9. 国際人とはどういう人进行うと思えますか。
 ・ いろんな国のことを知っている人、コミュニケーションのうまい人
 ・ 携帯電話を持っていて、外国語が話せて、世界を股にかけて仕事している人
 ・ 他国の異なった文化を偏見なく理解する人、外国で成功した人、など。

3. 授業実践

(1) 授業計画

テーマ：異文化コミュニケーション力の育成

対象学年：2年（40名）

教科：英語Ⅱ

配当時間：

1時限目 [エジプトについて—歴史—]

2時限目 [エジプトについて—病院—]

3時限目 [考察1—イスラム教と学校制度について—]

4時限目 [考察2—環境問題について—]

5時限目 [考察3—コミュニケーション力について—]

6時限目 [考察4—マスメディアについて—]

7時限目 [まとめ]

(2) 授業形態

日本人は、自分の意見をはっきり持たないと指摘されることがある。本当にそうだろうか。私は自分の意見をまとめて、発表することに慣れていないだけだと思う。そこで、グループ・プレゼンテーションを授業に取り入れることにより、コミュニケーション力の育成を計ることにした。クラスを5グループに分け、課題を与え、期日を指定し、グループ・プレゼンテーションをしてもらうことにした（資料2）。授業で他文化理解や開発・環境・人権・平和などに関する諸問題が取り上げられることにより、これらの諸問題が私たちの暮らしと密接な関わりがあることを生徒自身が発見

<資料2>

Syllabus for studies about Egypt		
- Requirement -		
1. I will give each group a reserch assignment on Egypt. This is, of course, evaluated for your second term grade.		
2. The questions about this study will be given in the mid-term exam of this term.		
3. Schedule		
- Topics -	- group # -	- Date -
*Religion in the world	group 1	October 3
*School in Japan, the U.S. and Egypt	group 2	October 3
*Environment problems in developing countries	group 3	October 5
*Language in the world	group 5	October 6
*Newspaper and general knowledge	group 4	October 12
*The schedule is, however, subject to change. If you have any questions, feel free to ask me. You are always welcomed. I hope you do best.		

し、探求していってくれればと願っている。

なお、プレゼンテーションの準備の時から生徒たちに関わり、なるべくかれらの意見を反映できるよう努力したつもりである。それから、雰囲気を出すためエジプト大使館観光局に頼んで、ポスターなどを送ってもらったり、資料に関しては、(株)サンライズ東地中海の池田政弘氏に大変お世話になった。

A. 1時限目 [エジプトについて—歴史—]

主題：エジプトの歴史を学ぶことにより、日本とエジプトの意外な接点を知る。遠い国だと思っていたエジプトを身近に感じさせる。

a. ピラミッドなどエジプトの遺跡の写真を使って説明する。

b. エジプトからシルクロードを渡り、日本に伝わったものを紹介する。

(紙・インク・シーサーなど)

B. 2時限目 [エジプトについて—病院—]

主題：エジプトの現在の状況を知る。

a. 病院—エジプトの乳児死亡率を日本のそれと比較。

日本の援助（お金だけでなく、人的援助の重要さも専門家らの仕事を通して説明する）。

b. ビデオ—「地球の明日を見つめて— JICAは今—」

C. 3時限目 [考察1—イスラム教と学校制度について—]

主題：イスラム教についての認識を深める。

エジプトの学校制度が深く宗教に結びついていることを知る。

a. 世界の宗教の分布図をつくり、プレゼンテーションする。

b. イスラム教について調べ、みんなの前でプレゼンテーションする。

c. 日本・エジプトの学校制度について調べたことをプレゼンテーションする。

d. 学校—エジプトの学校の写真などを使って、現状を説明（古いミシン、生徒の手作りの理科の掲示物、現地の高校生の歌による歓迎など）

e. 世界にはいろいろな文化、慣習、価値観があり、日本だけが特殊という考えを持つのは危険であることを認識させる。と同時に、文化の普遍性についても認識させる。

D. 4時限目 [考察2—環境問題について—]

主題：開発途上国における環境問題について認識させる。

a. アマゾンの熱帯雨林の問題など、途上国における環境破壊の問題について調べてきたことをプレゼンテーションする。

b. 生徒に特に南半球に問題が多いことに気付かせる。

c. エジプトの公害問題について認識させる。

d. 沖縄でも環境破壊が進んでいることを認識させる。

E. 5時限目 [考察3—コミュニケーション力について—] (資料3)

主題：英語は英米人だけのものではなく、意思を伝える道具であることを認識させる。

a. 言語の分布図、英語を公用語としている国を調べ、プレゼンテーションする。

b. いろいろな英語を聞かせる (エジプト・日本・アメリカなど)。

c. 英語で言いたいことが言えるのだという実感を生徒に持たせる。

d. 英語は実際に使うものであるという意識を持たせる。

e. エジプト人の積極性が外国語を学ぶうえで重要であることを説明する。

F. 6時限目 [考察4—マスメディアについて—]

主題：新聞を切り抜き、地域別に整理することにより、いかに途上国からの情報が少ないかを認識する。

a. 2週間分の新聞の切り抜きを地域別に整理し、感じたことを発表する。

G. 7時限目 [まとめ]

主題：これまでの授業を振り返って感じたこと、自分の意見などをまとめ、発表してもらう。

a. 映画「ベスト・キッド2」を見て、感

<資料3>

教科指導案

日時：10月5日(木) 教科：英語II

学級：2年2・3組(40名)

時間：5時限目(言語について)

ねらい：

1. 世界にはいろいろな言語があり、日本語だけが特殊でないことを生徒に認識させる。
2. 英語にはバラエティーがあり、英語を使って自分を表現することが国際社会において重要であることを生徒に認識させる。
3. 英語で外国人とコミュニケーションできるかどうかは、英語力だけでなく、コミュニケーションしようとする態度も大切であることを生徒に認識させる。

手 順	指導内容	学習活動	備考
導入 (5分)	・言語の種類 ・英語を公用語、あるいは第二公用語としている国について	・知っている言語を挙げる。 ・英語を公用語としている国を挙げる。	
展開 (40分)	・グループ プレゼンテーション *言語の分布図を使った世界の言語に関する知識の深化。 ・英語のバラエティーについて *英語にはバラエティーがあり、大切なのはコミュニケーションしようとする姿勢にあることを強調する。	・言語の分布図を使って、世界の言語について説明する。 ・分布図などを作りながら、自分たちが感じたことを発表する。 ・いろいろな英語を聞く。 (日本、フィリピン、エジプト、アメリカ合衆国) ・聞き取りをし、誰の英語が一番理解しやすかったか、なぜそう思ったのかを討論する。	言語分布図 テープレコーダ ハンドアウト
まとめ (5分)		・授業の感想を書く。	

想を言ってもらおう。

b. 真の国際人とはどういう人をいうのか討論してもらおう。

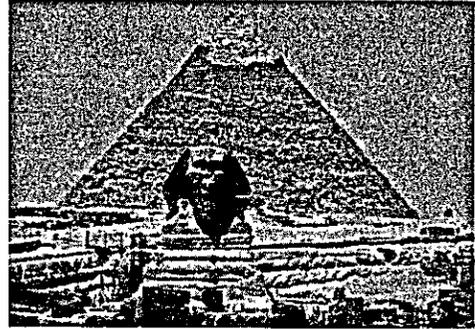
c. 他の国々とコミュニケーションしていくために必要なことを話し合う。

4. おわりに

私はかねてから英語を教える授業ではなく、英語でなにかを教える授業をしたいと思っていた。生徒自身が活発な学習活動することにより、知識理解だけでなく、リサーチやプレゼンテーション技術の習得や態度の育成をも可能にするような授業を英語を使ってつukれないものだろうかと思っていた。

そういう意味で今回こういう授業をすることができて私自身大変勉強になった。テキストもすべて手作りのものではあったが、幸い生徒の反応も予想したよりよく嬉しかった。以下は生徒の感想である。

「イスラム教の文化・生活をもっと知りたくなったので、本を探して読み始めています」「遠い夢の国というイメージだったけど、こんな身近な先生が旅行したなんて驚いた」「エジプトに対する偏見が授業のたびになくなっていった」「いろんな英語があることを知ってびっくりした」「いろんなイントネーションがあるから、自分も自分らしく英語がしゃべれるようになりたいと思った」「日本人はエジプトを見て、貧しくて汚い国だと思うかもしれないけれど、そういう見方ではいけないと思う」「認識のなさが大きな誤解を生むと思った」「今までテレビとかで見て知っていたエジ



クフ王のピラミッドとスフィンクス

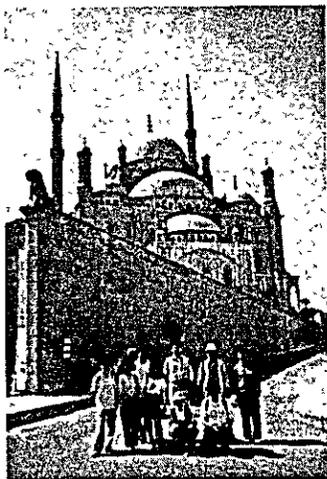


ガマール・アブデール・ナセル高校

プトは砂漠とピラミッドだけだった。でも本当は多くの人が一生涯懸命生きている国なんだ」「イメージだけでものごとを判断してはいけない。自分の目で確かめるべきだと思った」

もちろん、反省する点も多かった。私がエジプトで見てきたことをすべて伝えようとする気持ちがあまりにも強く、的を絞って授業を進めることができなかった。生徒は混乱したに違いない。これからもどんどん改良を続け、最終的には生徒が堂々と英語でプレゼンテーションできるようにしたいと思っている。

この授業が終了してから目に見える成果がひとつあった。それは、生徒の方からボランティア活動をしたいと言ってきたのである。そこで、手始めに老人ホームを訪問



モハメッド・アリ モスク

し、エイサーを披露した。その後、その体験を英文で書いてもらい、ジャーナルを発行した。これからも、続けていきたいと思っている。

研修に関してとても印象深い出来事が2つあった。まず1つ目は、ジョルダンのシニア隊員の青木さんのことである。彼はボーイズ・ホームで献身的に働いていた。きれいになったトイレを誇らしげに説明したり、ホームの子供たちの境遇を話す彼の態度には優しさがあふれていた。私は同じ青少年教育に携わる者としてかれの真摯な態度に感銘をおぼえると同時に、自分自身が恥ずかしくなった。国際社会の原点は人と人とのつながりであると痛感した。

もう一つは、この授業を始める前に母にエジプトやジョルダンの写真を見せながら今回の旅行の話をした時のことだった。母が本当に旅行が楽しかったのかと聞くので、私は「とっても楽しかったよ。だって、全然違う文化や生活だったからおもしろくて、退屈しなかった」と答えた。すると、

母は「私はこんな生活は二度といやだ。もう思い出したくもない」と、川で洗濯をしているエジプト人の親子の写真を指して静かに言ったのだ。

かつて、沖縄が第二次世界大戦後アメリカの占領下にある時、豊かな大国アメリカを横目に、沖縄の人は文化のレベルが低いとか、遅れている、公共心に欠けるなどと言われて、私の母はすごく悔しい思いをし、もう二度と貧乏な生活はいやだと強く思ったそうだ。考えてみれば、戦後まだ50年しかたっておらず、日本もつい40、50年前までは貧しかったのだと改めて認識させられた。

国際社会の原点は、人と人との結びつきだと思う。文化や価値観、外見の違いを乗り越えて人と人とが互いに理解しあい、尊重し合っていくことが重要なのである。自分がさまざまな人々に囲まれ、支えられていることを認識し、多様な生き方や価値観を認め、人間の優しさや思いやりの大切さを感じさせることなどがこれからの国際理



カイロ大学付属小児科病院

解教育において大切なのではないかと思う。

最後にこのような機会を与えてくれた JICA の皆さんには心から感謝している。この研修がなければ、私はエジプト・ジョルダンを訪れることもなかっただろうし、第三世界のことも知らずに毎日のほほんと生きていただろう。ましてや、青木さんと会うことも母親の幼い頃の話を知ることでもなかっただろう。本当にありがとうございました。

エジプトデータ

首都：カイロ
 人口：5469万人(91年) 人口密度5.5人/km²
 面積：100.1万km² (日本の約2.7倍)、国土の97%が砂漠
 政体：共和制
 元首：ムハマド・ホスニ・ムバラク
 言語：アラビア語(公用語)、英語、フランス語
 民族：東方ハム族系、ベドウィン族、ヌビア族
 宗教：イスラム教スンニ派(94%)、キリスト教系コプト教徒(7%)
 通貨：エジプト・ポンド
 為替レート：1USドル=3.05エジプト・ポンド
 国民総生産：325億100万ドル(89年)
 1人当たりGNP：630ドル(89年)
 国家予算：
 歳入 179億1000万エジプト・ポンド
 歳出 230億6000万エジプト・ポンド
 (国防費63億8000万ドル)(90年)
 主要産業：織物、石油化学、食品加工
 主要資源：石油、リン鉱石、鉄鉱石、マンガン、綿、米、豆類、果物
 産業別労働比率：農業21%、工業25%、サービス54%
 輸入額：74億3400万ドル(89年) 対日：4億7196万ドル
 輸出額：25億6500万ドル 対日：1億1892万ドル
 非識字率：51.6%(90年)
 平均寿命：男61歳、女64歳
 乳児死亡率：76.6人/1000人

豊かなマレーシア

～先進国に必要な姿勢とは？～



埼玉県立杉戸農業高等学校
教諭（社会） 青木孝夫（マレーシア班）

1. はじめに

(1) 本校の国際理解教育

本校は、創立75周年を迎え、農業・園芸・造園・食品流通・生物生産工学・生活技術科の6学科があり、各1クラスからなる農業高校である。生徒はみな純朴であり、田園に囲まれた広大な敷地の中で日々喜びをもって授業・実習に取り組んでいる。

本校は15年ほど前から、国際理解教育の一環として、大韓民国の農業高校と教員・生徒の相互訪問による交流を続けている。また、専門科目の農業や農業クラブの弁論大会を通じて学習しているため、海外の農業事情や援助活動に関心を持つ生徒は多い。校内の国際交流活動を担当していく中で、南北問題等の国際的状況を理解した上で行動できる高校生を育てたいと考えていた。また、私は開発教育ということ考えると、少々不安なことは、開発途上国での社会経験なしに、本に書いてあることを教えることが本当の開発教育につながるのか疑問に思っていた。

そんな時に国際協力事業団（JICA）の

高校教師海外研修の機会が与えられたのである。以下は、そのマレーシア研修を通しての本校での実践報告である。

(2) 開発教育の必要性

「途上国の視察のため10日間ほどマレーシアに行くので学校を留守にします」と夏休み前に生徒に伝えたが、帰ってくるといつの間にか「先生、フィリピンはどうだった」とか「パキстанは暑かった」と聞かれ、生徒の中には途上国というものが一色に捉えられていることを知った。最近では身近にも労働者としての途上国の人が多いというのに、十分でない認識しかないと感じたのである。

私は、国際理解教育と開発教育との違いは、守備範囲が、後者においては途上国がほぼ中心になるということと、その状況を理解して、改善のため何ができるかを考え、問題解決のため「一歩前へ」行動する力を養うことだと考えている。こう考えると、学校教育の中で国際化が叫ばれる中、多様な価値観を認めあう人権教育と同様に、国家間の人権教育とも言える開発教育の必要性を、研修参加後、改めて実感したのである。

2. 開発教育の準備

(1) アンケートの実施と方向性

本校生徒の理解度をみるため次の簡単なアンケートを開発教育の第1時限の中で行い、以後の実践のための資料とした。

- ①日本が開発途上国に対して援助を行っていることを知っていますか？
YES…62.2% NO…37.8%
(具体的内容について知っていた者…約20%)
- ②開発途上国は豊かだと思いますか？
YES…18% NO…77%
- ③豊かだと感じる国を一つあげ、理由も書いてください。
・日本(50.8%)…豊かだとさんざん聞いている、お金持ち、経済の発展、欲しいものが欲しい時に手に入る、どの家にも電気・ガスがある
・欧米諸国(21.3%)…芸術、自由な感じ、技術の進歩
・オーストラリア(6.5%)…自然が豊富
・開発途上国(8.1%)…平和、人間らしい、自然が豊か
・その他(13.3%)…未記入
- ④開発途上国に対してどんなイメージを持っていますか？
貧しい、食糧不足、きたない、土地が住みにくい、たいへんな生活、危険なところ。「泥だらけの道で、木でできたボロボロの家があってハエが飛んでいるような……」
- ⑤(開発途上国と独立年一覧表を見て)途上国の感想を書いてください。
・たしかに地球の南側に途上国が多い
・もと植民地だった国に途上国が多い
・独立して30年以上も経っているのにいまだに途上国なのは、なぜだろう？

以上のアンケートからわかることは、生徒の多くが途上国には豊かさを感じることがなく、途上国の限られた情報のためか相当な偏った見方をしている。かれらにとっての「豊かさ」は「物の豊富さ」であり、まさにGNPを物差しとした見方であるこ

とがわかる。GNPで見る先進国・途上国や大国・小国という考え方からは開発教育のねらいとする地球規模の相互依存性を知り、北側のおこすべき行動や変化は見えにくくなり、対等な関係を築くことはむずかしい。開発教育のスタートは植民地主義の反省からだが、援助のありかた、開発の考え方を誤ってしまうと正しい共生・自立には向かっていかない。経済には格差があっても、お互いの国の文化や生活には違いが存在し優劣がないことを理解すれば、開発のための援助も経済面に限らず、さらに効果的なものになっていくはずである。そこで次のように2つの方向性を出してみる。

A. 豊かなマレーシア

途上国をGNP以外の方法で逆説的に知る方向性。

B. 貧困の原因

生徒の感想にもある。「なぜ独立後いつまでも途上国なのか？」から貧しさの原因の理解、解決に向けての方法という方向性。

以上のように生徒の理解度、疑問点を生かす方向で本校の開発教育を考えてみた。

(2) 開発教育の視点

日本の食糧・鉱物資源の多くは欧米諸国を除くとアジアのいわゆる途上国から輸入されている。日本は、その豊富な資源と技術力を原動力として現在、経済大国となっている。だが、ごく基本的な疑問として資源を「売ることができる国」とそれを「買わねばならぬ国」のどちらが豊かであるのかということがある。だが、現実を見ると資源の多くが先進国によって消費されている。また資源は有限であり、地球環境への影響やその輸出は住民の生活権を奪ってい

る場合もある。これらのことから先進工業国というように工業国になることが途上国の目標であるという理論には行き詰まりがあるといえるし、GNPで両者を区分するのでは、正しい開発教育の視点とはなりえない。そこで「マレーシアの豊かさ」を知って、我々先進国に住む者がライフスタイルに変化を感じる必要があり、その学習活動の中で国際協力や援助のありかたや意識を高めていこうとするのである。

3. 授業のテーマと内容

マレーシア研修では多くの専門家、青年海外協力隊員の方々と知り合うことができ、貴重な経験を積むことができた。私が見聞したマレーシアは、歴史上飢餓を知ることなく大自然に囲まれ、温かな心を持った人々であった。また、ゴムとスズの国から工業国へと変身を遂げていて、いわゆる深刻な問題点はあまりみられないという。しかし、日本との関係で考え直していかなければならない構造的な諸問題（南北問題）が存在し、これをテーマにしてみた。

(1) テーマ

豊かなマレーシア

- ①対象学年 高校3年
- ②授業教科 政治経済
- ③授業時間 全8時間（以下に内訳）
 - ・1時限目 開発途上国ってどんな国？
 - ・2時限目 南北問題とODA
 - ・3時限目 マレーシアの食文化
 - ・4時限目 マレーシアという国
 - ・5時限目 熱帯雨林と日本
 - ・6時限目 パーム油と日本

- ・7時限目 途上国との関わり方とは？
- ・8時限目 先進国に必要な姿勢とは？

④教材 各時限に資料プリントの作成（後掲）やビデオを使用し効果をあげる。

(2) 授業内容

A. 1時限目 開発途上国ってどんな国？

ねらい：生徒の多くが途上国の知識があいまいである。アンケートを実施し今後の資料とする。ビデオを使用し開発教育の導入とする。

- a. 研修視察の話題“豊かな国”。
 - b. アンケートの実施・回収。
 - c. ビデオ「開発途上国ってどんな国？」（外務省）の視聴・感想。
 - d. 開発途上国の定義。
- ##### B. 2時限目 南北問題とODA。

ねらい：GNPという基準で先進国と途上国が分かれている。両者の格差が南北問題であり、それを縮めるための政府援助は多岐にわたっている。中には、それが機能しにくいこともある。政府援助は相手国の事情も考慮した長期的な視野に立ったものであることを理解する。

- a. 世界の様子を知る（南北問題）。
- b. GNPで見た世界地図の参照・感想。
- c. ODAの説明。青年海外協力隊の活動。日本国民1人あたり1万円という額。2国間贈与、貸与の内容。
- d. ODA支出（有償資金協力分）と返済に動く金の流れの説明。円高の影響でドルベースでの返済額が増え、大きな経済的負担となる場合もあるが、政府間の援助はさま

ざまな影響を考慮して、長期的な視野をもって行われる必要があることを理解する。

C.3時限目 マレーシアの食文化

ねらい：GNPで見ると途上国は小さく映るが、視点を変えると豊かさを発見できる。途上国の人々は自分の国を貧しく思っているのか疑問を抱かせる。

- アンケート②③④の結果利用、感想。
- ビデオ「アジア発見」(NHK)でマレーシアの屋台料理の様子を見て食材の豊富さ、物価の安さ、清潔さを知る。
- ビデオを見る前と後で途上国のイメージがどう変わったか感想を出し合う。

D.4時限目 マレーシアという国

ねらい：途上国の共通的な経済体質としてモノカルチャー経済があるが、マレーシアも近年までこの問題に悩まされていた。途上国における問題点の提起。

- 民族、歴史、経済成長、東方政策。
- マレーシアの輸出構造を見ると、経済成長とともに一次産品輸出の比率が低下している。マレーシアの独立後唯一のマイナス成長(1985年)は世界的な原油・ゴム・スズ価格の低下の年と重なり、成長著しいマレーシアでさえもモノカルチャー経済であるため、世界経済の影響を受けやすい。モノカルチャー経済の体質的脆弱性を知り、その需要を左右するのが先進国であることに気付かせる。
- 日本企業のアジア進出状況を見る。円高による産業の空洞化ということもあるが、結果として、まだ多くの国がモノカルチャー

経済にあるアジアに、日本企業が進出することによって、途上国の産業構造の変化(工業化)になっていることに気付かせる。

E.5時限目 熱帯雨林と日本

ねらい：地球環境や森林は人間のためだけに存在するのではない。核戦争は起こらなくても地球は破壊されている。核戦争はもしかしたら起こるかもしれないが、でも熱帯雨林の破壊はもう起きている。そのことに日本が関与していることを理解する。

- 熱帯雨林の地球環境への役割と破壊の現状の説明。
- 世界人口の2%の日本が世界木材輸出量の30%を占める最大の輸入国である。日本でのその用途については、多くが使い捨てになっている現状を知る。(グラフ参照)
- 1980年代末の東マレーシア・サラワク州の「ブナン族の受けた苦しみ」(明石書店「アジアの子ども」)を読み、日本の輸入が地球環境の破壊のみならず先住民の生活権も奪っていることに気付かせる。
- 考察：現状では、南洋材はマレーシアの主要輸出品である。高校生として何ができるだろうか？ 意見を出し合う。

F.6時限目 パーム油と日本(資料1)

ねらい：日本の食を支えているともいえる重要な輸出品としてパーム油がある。マレーシアのプランテーション作物を通して両国の問題点(資料参照)を提起して先進国の姿勢を考えさせる。

- 世界パーム油の生産量と日本の輸入量の現状を知る。

b. パーム油はエコ商品として人気があり、日本では工業用、食品加工用として欠くことができない資源である。先進国の大量消費社会の好み（要求）に左右される途上国産業の現状を理解する。

c. 環境配慮の結果、パーム油に依存することになるが、増産のための森林伐採や農薬汚染で住民が苦しんでいることを知る。

南洋材輸入ほどではないにしても、間接的には環境への影響があることを理解する。

d. プランテーションの問題提起。パーム油の労働力としては、主にマレーシアでは少数民族のインド人があたる。中には小学生以下から働くこともある。また、多国籍企業の介入による経済的格差の助長などの南北問題の共通の構造的問題を知る。

e. パーム油を原料とする石けん、シャンプー

の消費が日本の水質汚染の原因の一部になっている。湖沼の富栄養化や洗い終わった後の水のゆくえを知り、日本の環境問題にも注目する。資源とライフスタイルの関係を意識させる。

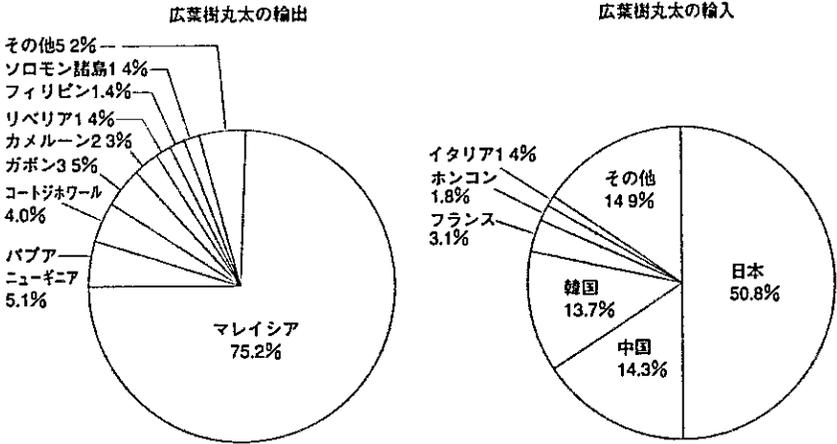
f. 考察：c～eを知り高校生としてできることは何か、意見を出し合う。

G. 7時限目 途上国との関わり方とは？（資料2）

ねらい：日本も海外から援助を受け、現在に至っている。途上国の「開発」に先進国として関わっていくときにODAに目が行きがちであるが、高校生として何ができるのかを、NGOの活動紹介や、日本が受けた援助をヒントに、身近な問題として捉えさせる。

○世界の熱帯木材の主要な輸出、輸入国（1986年）

熱帯広葉樹丸太（計2,528万m³）



- a. 新聞記事を読み、日本も援助受入国であったことを知る。
- b. 現在、日本は多額のODAを途上国に対して行っている。国際協力の種類を再確認し、ODA自体が万能・即効性のあるものではなく、多岐にわたるもので、長期的視野で国際協力を捉えねばならないことを理解する。
- c. NGOとは何か？ 活動の内容を知る。
- d. 考察：a、b、cを踏まえ、新聞記事を読み、日本の復興・発展をヒントに、高校生として、途上国に対して「できること」と「できないこと」とは何か、意見を出し合う。
- H. 8時限目 先進国に必要な姿勢とは？
(資料3)

ねらい：マレーシアの漫画家ラットさんの絵を通して途上国との関係の中で我々のとるべき姿勢について考えさせる。さ

らに青年海外協力隊員からのメッセージを読み国際協力のあり方を学ぶ。

- a. マンガを見て各自の考察
- b. 協力隊員・河添靖宏さんからのメッセージを読み、各自の考えを発表していく。
(写真1)

4. おわりに

今回の研修プログラムで日本の国際協力の一端に触れたが、現地で協力活動をする人たちの話を聞くにつれ頭が下がると同時に、自分自身としてできる、高校生への啓蒙をしていかなばならぬと感じたのである。生徒たちの授業の反応は概してよく、将来にむけて新しい視野をひらく一助となったものと感じている。

反省になるが、私は今回の「豊かなマレ



写真1 左が隊員の河添さん

イシア」という視点はすべての途上国理解に必要なものだと感じるが、例えば、最貧国を題材にすればまた違った視点があったと思っている。この視点を選んだのは、初体験の途上国の活気あふれる人々と人なつ

っこい小学生の笑顔が印象に残っていたからであった。開発教育に携わっていく時、この視点をいつまでも忘れずにいたいと思うのである。

〈資料1〉

6. 豊かなマレーシア「パーム油と日本」
—日本の「食」を支える—

① パーム油…アブラヤシの果実から抽出される油のこと



② マレーシア製の鳳梨缶（せつけん会社のインタビューから）

a. プランテーション作物である

ヤシの一種であるパームヤシは、油分の多い實がある。実質は、収穫してからすぐに処理しないと変質することになる。このため、パーム油のプランテーション（農園）には工場がセットになっており収穫されたパームの實はすぐに処理される。このようにパームヤシの實は高度的なプランテーション作物の形式をとっている。

b. 生産者を補償した生産…伝統農業・家畜飼育の低下

c. 農園やプランテーション経営者の農業者による大規模所得

d. プランテーションで働く人々への雇用の提供および生産コスト削減のための労働力増強

e. プランテーション経営のための熟練労働者の確保、生産者の健康

f. 社会福祉の文化と生活水準の向上

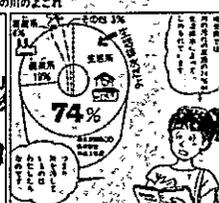
g. 世界の自由貿易に参入を促していく事による経済的発展の助成（もうけは多国籍企業にいき、労働者層にはあまり還元されない）

③ 日本製の鳳梨缶

★ アジア諸国の洗剤およびシャンプーの消費量

国	洗剤 ㎖/人	シャンプー ㎖/人
マレーシア	2.2	156
インドネシア	1.1	70
タイ	1.5	135
韓国	3.2	647
日本	8.1	732

★ 埼玉県の水のよごれ



④ 日本にマレーシアから輸入されるパーム油

30万トン

- 約4.5%…食品用（工業用）
- せつけん（全輸入量の5%程度）、洗剤
- 約5.5%…食品加工用（全食用加工量の2.2%がパーム油）
- マーガリン、ファットスプレッド、ショートニング
- 揚げ油（ほぼ100%がパーム油）、膨張クリーム用

★ パーム油輸入量の見せ（輸入国別の要求）

a. 加工食品（環境にやさしい原料性）としての要求

b. 食糧でも食糧を確保するための原料性

c. 水を輸入してから2～3年で実をつける（安定供給・安定価格）

★ パーム油は数量的に見ても日本の「食」に欠くことのできないものといえる

★ 洗剤を使った後の水のゆくえ



⑤ ②を知り、高校生であるみんなには何ができておもしろいかな？

マンガ：埼玉県環境事務所発行「川を守る切り札」より

〈資料2〉

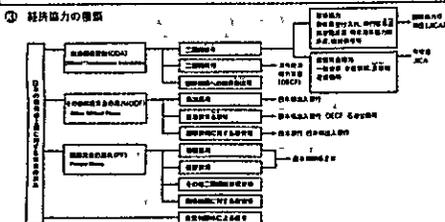
研究教育 7. 研究途上国との関わり方とは？
 ① 日本も被爆国だった！ (90.7 毎日新聞)



② 両国途上国のODA受取総額(百万円) [経済協力ハンドブック1993]

途上国	1991	アメリカ	ドイツ	フランス	イタリア
インドネシア	1590	113	149	45	39
インドネシア	1729	10	68	17	65
インドネシア	1771	10	29	19	17
インドネシア	2832	10	42	110	81
インドネシア	962	10	49	22	7
フィリピン	2823	10	53	285	5
インドネシア	1019	10	158	10	142
インドネシア	2823	10	165	10	118
インドネシア	6281	10	625	10	102
インドネシア	858	10	25	10	103
インドネシア	9823	10	80	10	141
インドネシア	4714	10	370	10	242
インドネシア	6275	10	360	10	171
インドネシア	200	10	10	10	210
インドネシア	3271	10	10	10	10
インドネシア	2779	10	10	10	10
インドネシア	140	10	10	10	10
インドネシア	1053	10	10	10	10

③ 経済協力の構造



④ [考察] 両国途上国に対して「できること」と「できないこと」とは何か？
 整理して、書き出してみよう。

★ 生徒の意見

「できること」	「できないこと」
<ul style="list-style-type: none"> 日本の農業や工業の技術を途上国に教える 専門の技術をもっている人を送る 食糧を送る 資金を援助しないで物を送る 水道に当たるものは、本来ある機会をもつ ボランティア活動 職業技術を伝える 今の状態をもっとたくさんの人に知ってもらう 商品や本などを送る 使わないものを送る 古くなった物をリサイクルする 環境美化の輪を送る 途上国の方で再発してはけ見直していき 途上国も先道も同じ立場だとする心を持つこと 輸入する量が多いので、ムダ遣いをしない お互いの国で同じいや友だちを深める 教育を充実させてあげる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手政府のやることと勝手に口をだすこと 国の生活習慣や条件をかえてしまつこと 身分制度をかえること その国の制度、文化、政治に口を出すこと その国の生活習慣などを教えることはできないと思う

〈資料3〉

研究教育 8. 先進国に必要な姿勢とは？

① マレーシアのマングラ ラットさんの絵を見て考える



【考察】 絵の中の「STOP」って何をやるものだろうか？ 考えよう。

② 青年海外協力隊員(マレーシア) 川添増定さん(村農開発班員)からのメッセージ

トキコ

海外で自分と同じ持っている「価値観」の出し、買っていることばかり見ている。また、私はマレーシアでの生活として、日本の価値観を押しつけている。でも、自分たちの価値観の押しつけていることにも気づき、自分たちも、自分たちの価値観を押しつけている。よく観察して、自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。

トクコ

日本からの援助の必要性

この国でもマレーシアは工業化が進み、ODAの需要も減ってきている。その国を援助している限りでは日本の援助がなくなってしまう。でも、マレーシアの援助員も、自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。

また、マレーシアの援助員も、自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。

現地の人の、文化の押しつけていること

自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。

自分さんへのメッセージ

日本へ来たことがあるマレーシアの人達には、自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。自分たちの価値観を押しつけている。

★ 上の文を読んで、感じたことを書き出そう。

マンガ：筑摩書房「マンガで見る東南アジア」より

共に学び合う視点で

～マレーシアを題材にして～



青森県・八戸聖ウルスラ学院高等学校
教諭（家庭科） 掛端不似子（マレーシア班）

1. はじめに

国際理解教育の重要性が取り上げられている中で、生徒たちはどのような関心を示しているであろうか。本校生徒で感じることは、アメリカの姉妹校における短期研修や、本校にアメリカ、オーストラリア、フランスからの留学生が学んでいるせいもあると思われるが、全体的に感じられることはアメリカに対する関心の高さである。姉妹校は各国にあり、毎年アジアの姉妹校にはクリスマス献金を通じて援助が行われているが、関心のまなざしが違うと感じられる。

私は現在、国際交流クラブの顧問をしているが、クラブの生徒たちは上記の状況を踏まえて、欧米にだけ関心を持つのではなく、もっとアジアに目を向けようと毎年一つの国を取り上げ、研究と交流を続け、その輪を全校に広げようとしている。そのような中で、今回の私自身のマレーシア研修を機に、授業を通して、マレーシアに関心をもち、日本との関係を理解させ、この国の素晴らしさを知り、学び合うことを課

題として授業を試みた。さらに本校に隣接する八戸工業高等専門学校に学ぶマレーシアの留学生たちにもっと関心と親しみを持って接してほしいと願いつつ。

なお、私は家庭科を担当しているが、家庭科の年間指導計画に、本校では国際協力の分野についてはまだ入れていないため（将来は組み込む必要あり）他の教科である「外国事情」が最も適切と考えた。

現在、英語科の1～3年までそれぞれ「外国事情」を1単位ずつ履修している。授業をするにあたり、2年と3年は英語で授業をしているが、1年は日本語で授業をしていることと、マレーシアについてまたマレーシアと日本の国際協力について生徒たちに考えさせたいとの、私の希望と教科担当者の協力によって実施できた。なお、このクラスは今までインディアンと、インディアンの精神的な背景について学んでいる。

2. 授業にあたって(事前調査)

事前指導としてアンケートを実施した。その結果、マレーシアは東南アジアの一国

である。

資源として錫やゴムがある。複合民族国家であるなどはだいたい理解している。

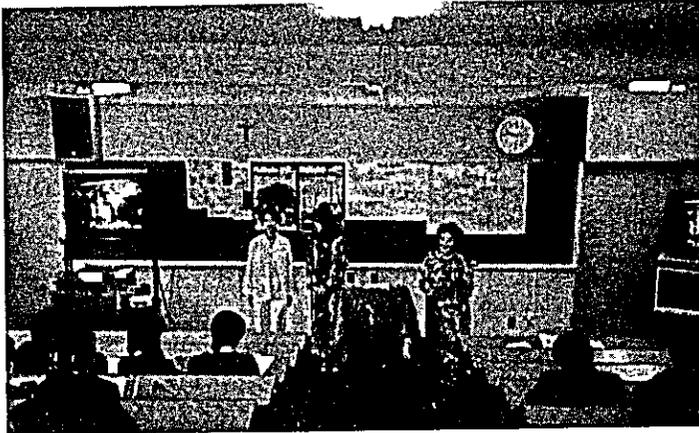
しかし、首都や首相について、またどのような政策を進めているのか、日本の統治と戦後の日本とマレーシアの関係などについては理解されていない。マレーシアの文化についてはなおさらである。そこで、関心を持たせたく、民族衣装であるバジュロンを着用して臨むことにした。

3. 授業のテーマ

事前調査による生徒たちの状況と私自身のマレーシア研修から、ODAがどのような背景でスタートしたのか、日本とマレーシアの関係、ルック・イースト政策を掲げて急速な経済成長を続けているマレーシアの今、それを支える多民族構成から日本が学ぶもの多しと考え、“援助から相互協力へ”と設定した。

学習指導案

教科	外国事情	マレーシアを訪れて (援助から相互協力へ)		指導者	掛端不似子
学級	1年英語科	29名	教材	レジメ・ビデオ	
学習内容				指導上の注意	
導入	マレーシアの概要と研修目的を理解する			地図	
展開	①ビデオ (別紙解説) 首都クアラルンプール } 町のたたずまいを解説する クアラカンサー } サラワクの州都クチン } SIRIM ポリテク高専 } 青年海外協力隊や 複層林ビドール事務所 } 専門家チームの サラワク救急医療プロジェクト } 活躍を解説する セメンゴ野生動物 リハビリテーション 福祉協会			・マレーシアの町並み～美しい町並み、寺院～を理解できるよう説明しながら進める ・協力の現場で各々詳しく内容を説明し、理解しやすいように配慮する	
まとめ	②マレーシアへの経済的援助のスタートと日本の統治を学ぶ ③急速な発展をするマレーシア経済を学ぶ ④プミプトラとその歴史的背景を学ぶ ⑤豊かな自然を学ぶ ⑥国際化のモデル、マレーシアに学ぶ			・マレーシアの特徴を理解させる ・日本の関わりを (戦争も通して) 理解させる ・マレーシアのフタバガキと白神山地のブナの木を比較して自然の恵みを考えさせる ・マレーシア人の伝統的な気質等からその良さを学ばせる	
まとめ	・ODAとNGOが援助の両輪 (援助から協力へ) ・同じ目線でマレーシアからの留学生に接しよう ・感想文の提出をする			補足説明	



授業風景

4. 授業展開

(1) ビデオによる……展開①

クアラルンプールのエキゾチックな王宮や、回教寺院、そして美しい旧連邦政庁舎、鮮やかなバジユクロンを着て行き交うなんとも優雅な女性たち。モスクから祈りの時間を知らせる美しいアザンが響きわたる。燃えるような花の色、頬に伝わってくる熱気、深い緑の中で吸う息も吐く息も、ゆったりと優しくなっていくような思いにとらわれた。サラワクのジャングルで、少し寂しげで優しい目のオランウータンにも会うことができ感激。

また、ヤシの木立の続くダマイビーチはやはり美しい。私たちが知っている砂浜とマングローブの浜辺の違いをようやく納得したといえる。

自然の美しさにひたりながら今回の研修では、産業廃棄物の処理、自然林の再生、サラワク木材利用プロジェクトでは、合板として木材を100%利用する研究協力の現

場を視察した。

2020年を目指し、経済的にも急成長を続けているこの国に、かつての日本と同様、水質汚濁の公害をおこさないために、日本における公害防止のノウハウを提供している。

なによりも、現地の人と共に生き、指導や協力活動に携わっている専門家、青年海外協力隊の方々の真摯な姿勢に大きな感銘を受ける。これをビデオ内容解説のプリントを使いながら説明。

(2) マレーシアへの経済的援助のスタートと日本の統治……展開②

日本は1941年12月8日、シンゴラ、パタニ、コタバルに侵略開始。マレー半島を南下し1月11日クアラルンプールを占領する。次いでシンガポール陥落。

3年半の期間統治した。その間タイとビルマを結ぶ泰緬鉄道を建設したが、18万人以上の人々が労働者として働かされ、脚気や飢餓などで半数以上が犠牲となり死亡。

1945年8月15日、日本軍敗戦。1966年日本はマレーシア政府第1次5カ年計画に

180億円の有償資金協力をする。以来1994年までの累計総額が6463億円に達している。無償資金協力は1994年までで110億円で緊密な関係にある。

(3) 急速な発展をするマレーシア経済… …展開③

マレーシアは19世紀から20世紀にかけてイギリスの植民地下にあつて、ゴムと錫の生産と輸出にだけ依存していた。しかし独立以後は農業の多角化を図り、さらに一次産品に依存した経済体質からの脱却を目指し、輸出志向型製造業の育成に力を入れた。その結果アジア有数の新興工業国家となっている。80年代後半からは年平均8～9%の成長率を遂げている。現在エアコン世界第2位、半導体は世界第3位など電機、電子機器の一大生産輸出基地となっている。

現在マレーシアでは「第6次マレーシア計画」や国家開発政策によって、マハティール首相の強力なリーダーシップのもと、西暦2020年までに先進国の仲間入りを目指している。

日本とマレーシアの経済的なつながりは強く、マレーシアにとって日本は貿易、投資の分野で全世界の2割を占めるパートナーである。

マレーシアの1人あたりのGNPは3000USドルを超えといわれ、すでに「無償資金協力」の対象国ではない。「援助卒業国」との評価が高く、現在は南アジアやアフリカなどへ南南協力をはじめている。日本からは戦後の高度経済成長の経験をふまえて、効果的な協力が期待されている。

(4) ブミプトラとその歴史的背景…… 展開④

独立国としての歴史は新しく40年に満たないが、住民の歴史は古く4万年前の人類の遺跡がサラワク州で発見されている。

15世紀初頭 マラッカ王国の成立

1511年 ポルトガル、マラッカを攻略

1641年 オランダ、ポルトガルに代わって占領

18～19世紀 イギリスによる植民地化（ゴムのプランテーションにインド人を導入）

（錫鉱山労働者として中国人を導入）

1942～1945年 日本占領時代

1957年8月31日 「マラヤ連邦」アブドル・ラーマンの下に独立 11州

1963年9月16日 「マレーシア」成立 14州

1965年8月9日 シンガポール分離独立 13州

1969～1970年 アブドウル・ラザク2代目首相、人種暴動に対処する

1971年 憲法改正により、マレイ人優先主義（ブミプトラ）をうちだす

1976年 フセイン首相就任

1981年 マハティール首相就任

1993年11月 マハティール首相総裁に再選

※ブミプトラ……植民地時代に労働力として導入された中国人、インド人に独立後市民権が与えられる。

互いに没交渉で市民生活を送っていたが、独立後、気がついたときは商才に長けた中国人が経済力を持つにいたった。

これらの状況を背景に人口構成では割合が一番多いマレイ人保護のために、その割合に応じてマレイ人が社会のあらゆる階層に組み込まれるよう配慮した政策。またマレイ人の早婚、親類縁者の結婚が多いことからマレイ人の遺伝的劣等性も保護の根拠とされた。

(5) 豊かな自然……展開⑤

マレイシアにはさまざまな自然の表情がある。どこまでも続く海岸線と数多くの島々、色鮮やかな蝶が舞い茶畑の広がる高原、熱帯の動植物の宝庫であるジャングル、そして国の指定と保護を受けた数多くの国立公園など。

最近、環境問題が全地球的課題としてクローズアップされたが、マレイシアでは現在でも国土の7割が森林に覆われている。ボルネオ島のサバ州とサラワクでは、いまだ人類未踏の原生林が残されている。

振り返って、世界遺産として守っていくこととなった、日本の白神山地のブナの巨木も、マレイシアのジャングルを支えるフタバガキも、同じように森の母なる木である。自然との共生は共通課題といえる。

(6) 国際化のモデル、マレイシアに学ぶ……展開⑥

マレイシアはマレイ系(59%)、中国系(32.1%)、インド系(8.2%)をはじめ数多くの民族からなる「複合民族国家」である。

それぞれの民族が異なった言語、宗教、生活習慣をもちつつ、お互いの文化を尊重

しながら生活をしている。

たとえばマレイ系のほとんどがイスラム教徒であり、豚肉は食べず、他の肉についても「ハラル」と呼ばれるイスラム教に則って屠殺された肉以外は食べることを禁じられている。そして毎年イスラム暦の9月に1カ月間、日の出から日没までの断食が定められている。

またインド系の多くはヒन्दウー教徒であり、牛を神聖な動物としてその肉を食べない。厳格なヒन्दウー教徒は肉食主義者である。

これに対して中国系は仏教、儒教、道教が主であり、宗教上食生活のタブーはない。

信仰の違いによって食習慣や生活様式の違う民族が、その違いを乗り越えて共に学び、共に働き、強力な指導者マハティール首相のもとにマレイシアという一つの国づくりのために協力しあっている。

多民族国家であるからこそ、インド、中国、イギリスとの関係強化の可能性もある。現在世界のいたる所で、民族間の紛争がおこっているが、信仰の自由と宗教的寛容さを持ち、それぞれの価値観と生活様式を互いに認め合うマレイシアは、まさに世界の多民族国家のモデルといえる。特に「国際化」を掲げている日本は多くのことを学べるのではないか。

振り返って現在八戸高専に8名のマレイシアからの留学生が学んでいるが、どの方も控えめで細やかな心遣いをする学生たちである。かつての日本人の良さも持っていると言われているが、それこそがマレイシアの人々の気質である。かれらの節度ある生活や礼儀正しく、いつも慎み深い行動に

做りたいものである。

(7) アンケートと感想文

授業の後、生徒にアンケートと感想文を実施し評価をした。

A アンケート評価

マレーシアに興味を持った……11%

マレーシアと日本の関係（貿易や国際協力）の大切さがわかった……39%

日本はマレーシアに学ぶことが多いことに気付いた……50%

生徒たちはこの中で、あまりにもマレーシアについて知らなかったことや、日本による侵略戦争や統治を知らなかったことを恥じている。

しかし、その責任は生徒たちにのみあるのではない、教育をする側にありと痛感する。

B 感想文

a. 今まででは、はっきり言って興味がなかった。だけど今日授業をうけて、マレーシアに対する考えが少し変わり、いろいろなことをもっと知りたい。

日本とマレーシアはあまり関係がないと思っていたが違っていた。貿易だけでなく留学生が今まで4000人も来ていること、そして戦争時代のことを調べてみたい。マレーシアに一度でいいから行ってみたい。

b. もともと東南アジアなどに興味がありましたが、今回の授業をうけてますます興味が深まりました。日本がマレーシアを支配していた時、日本は大変ひどいことをしたと聞きました。そういったことは償うべきだし、国際協力の面でもう少し援助していかなければと思いました。

現地に赴き技術を伝える仕事に携わる人々に、とても感心しました。マレーシアといえば熱帯雨林や途上国のイメージばかりだったので、高層ビル群を見て少し驚きました。

マレーシアに対する偏見を捨てるいい機会となりました。

c. 私にはどうしてもアメリカ、ヨーロッパという考えがほとんどでしたが、今日の授業を受けて、訪ねてみたい、この国の方たちと交流を深めたいと思うようになった。

木材のほとんどがマレーシアからだということは知っていましたが、関心はありませんでした。マレーシアの国土の7割が森林だと知って、どれほどすごいかということがわかりました。木材を大切にしたいです。

そして日本とのかかわりがとても大きいことがわかり、これからもいい関係が続けられるといいです。同じアジアなのに首都も首相も知らなかったことを恥ずかしく思っています。

5. おわりに

生徒たちの感想文からもわかるように、マレーシアへの関心と協力について理解が深まったのは、望ましい変化である。さらに欧米だけに関心を持っていた生徒たちが、アジアにその必要性を感じるようになったのは、ある程度の成果はあったものと思う。

しかし問題点や課題も感じた。1時間という限られた中で、多くを詰め込みすぎて

「共に生きる、学び合う」というレベルまで生徒たちの意識をもっていけなかったことである。

私自身の教材づくりにも、多々工夫すべき点があると実感している。

それでもなお私にとって大きな収穫は、授業のためにマレーシアについて調べていくうちに、マレーシアの魅力にますます惹かれていったことである。これからも自己研鑽に努め生徒たちと学んでいきたいと考えている。

◎参考文献と資料

もっと知りたいマレーシア 弘文堂 石井米雄・綾部恒雄 編

マレーシアの魅力 サイマル出版会 栗山昌子 著

アジアと日本人 小学館 大前研一 著

マレー・ジレンマ 井村文化事業社 マハティール・ビン・モハド (高多理吉 訳)

熱帯多雨林の植物誌 平凡社 W・ブイーファーズ・カーター 著 (渡辺弘之 監訳)

JICA 高校教師海外研修用資料

マレーシア事情の資料 マレーシア政府観光局 徳永誠

◎使用教材

- ・民族衣装(バジュクロン、バジュムラユ)
- ・地図
- ・レジメ
- ・ビデオとビデオ内容解説のプリント
- ・フタバガキのつくばね種子とブナの種子
- ・織物 (イバン族のプアクンブー)
- ・ネックレス
- ・ビュータの花瓶

第2章

研修参加の前提になったもの
～実践展開事例～

こうすれば書ける エッセイコンテスト



奈良県立高円高等学校
教諭（国語） 矢野佳津（バラグアイ班）

1. はじめに

国際理解教育や開発教育は、関心のある者にとっては興味深いテーマであり、研究のしがいのある分野だと思う。しかし、「開発途上国って何？」という素朴な疑問からスタートしなくてはならない多くの生徒たちを前に、国語科という教科の中で、どう展開していけばいいのかは難しい問題である。

また、「国際化」の大切さが強調される中で、まず生徒一人一人の、自ら考え、調べ、発言していく力を育てたいと考えていた。国際協力事業団の「高校生エッセイコンテスト」への参加は、その一つの試みである。「まったく知らないことで原稿用紙3枚以上も書くのはとても無理」という生徒の声に負けずに、国語の授業として取り組んだ実践例を、以下にまとめてみる。

2. イメージをつかむ一何が問題なのか

①企画の発表

「エッセイコンテスト」に取り組むこと

と、コンテストの概要を知らせるため、募集要項のダイジェスト版を印刷して配る（資料1）。準備を十分にすれば必ず書けること、そのための時間を取ることを説明する。どのようなコンクールでもそうだが、生徒はまず賞品につられて、その気になる。入賞者はその成果を高く評価することもつけ加え、がんばって書こうという気にさせる。

②昨年度の入賞作品の検討

どのような作品が入賞したかを知るため、昨年の入賞作から2部印刷して配る。プリントには、作業項目として次のように印刷しておく。

作業：作品を読みながら、入賞したのはここが良かったのだと思うところに線を引いてください。

プリントは、後述の3の資料集め時に利用して回収し、あわせて評価する。

②タイトル検討

次に実践するときには、作品の検討と同時にタイトル一覧も印刷してみようと思っている。内容を知るためと、題のつけ方を考えさせるためである。

〔資料1〕

小論文を書く 高校生エッセイコンテスト

手順1 昨年の入賞作品を読む(良い所に傍線を引く)

2 テーマを選ぶ(題は自分でつける)

自由作文部門——開発途上国について日頃考えていることや

感じていること

例 「国内外で開発途上国の人々とのふれあいを通じて感じたこと」「国際社会における

日本の役割」等

テーマ論文部門——最近、開発途上国や国際協力について、

新聞・テレビ等でニュースになったこと

について

例 「ルワンダの難民問題」「青年海外協力隊

員の活動」等

3 新聞などから資料になる部分を集める。紙にのりづけし、

コメントを書く

(注) テーマ論文部門は、ニュースの概略を四百字一枚にまとめる必要がある

ので、何月何日、何新聞何刊、何面かメモをしておくこと

4 小論文を書く

自由作文部門 四百字四枚

一行目から本文を書き始め、

テーマ論文部門 四百字三枚 最後の行まで書くこと

概略一枚

5 のりづけした資料とへ表紙をつけた小論文を提出

五月十五日(月)消印有効

学校からまとめて郵送しますので

五月十二日(金)までに

提出してください

③VTR視聴

各自のエッセイのテーマを決める手がかりとするため、「外国人による日本語弁論大会」の中から、エッセイコンテストの参考になるものを視聴させる。50分の授業では、5～6人が適当である。審査用紙(資料2)を配り、メモを取りながら視聴させる。審査員になったつもりで取り組み、より真剣に集中することができるからである。

このVTRは、外国人の見た日本の問題を知ることで、日本と世界の何が問題なのか明らかになるし、一生懸命に語る出場者の姿勢が、生徒たちには好評である。世界にいろいろな英語があるように、いろいろな日本語もできつつあることに気づく生徒もいる。

また、話し方の実際を知ることでもできる教材である。

＜資料2＞

VTR 外国人による日本語弁論大会

組 番 ()

	国名	内容のメモ
1		
2		
3		
4		
5		
6		

Q. 話し方や話の組立方で、工夫しているなと思った点を具体的に書いてください。

Q. 優勝者は誰だと思いますか、理由も書いてください。

Q. 今回のVTRを使った授業で、気づいたこと考えたことをくわしく書いてください。

③ 海外研修の話

VTR 視聴にかわるものとして、教師自身の海外体験談も有効である。今回の海外研修を利用する場合、次のような展開ができる。

〈作業1〉 南米についてのイメージを書かせる（資料3）。少し書いたところで、まわりの生徒と意見交換し、プリントに書き込む。

〈作業2〉 写真、絵はがき、現地の新聞、その他持ち帰った資料を回覧させ、補足説明をする。写真などがまわってくるのを待つ間に読めるよう、パラグアイを舞台にした短編小説のプリントを配っておく。村上龍の「パラグアイのオムライス」が、大修館の国語IIにある。

〈作業3〉 最後に写真や資料を見て考えたこと、疑問点などを書かせて提出させる。

③ 「地球家族——フォトランゲージ版」を使って

国際理解教育センター（ERIC）発行の写真集を使う方法。今回の海外研修の事前東京研修で、ERICの方から教えていただいた参加型学習の手法で、これだけで独立した単元に十分なるが、エッセイコンテストの展開の中に利用してもおもしろいと思

う。

写真はB4判30枚組で、世界30カ国の人々のふつうの暮らしが写っている。家族の全員と持ち物すべてをならべて撮ったものである。

〈作業1〉 2人1組で好きな写真を1枚選ばせる。何を持っているか確認させ、その人たちに聞いてみたい質問を3つ作らせる。プリントに記入させる（資料4）。

〈作業2〉 写真についての理解ができたところで、全員が立って写真を持ち、豊かさの順に並ぶよう指示する。教室では初め3列にわけて行い、トーナメントにしてもよい。

何を豊かさとするかが、この作業のポイントになる。お互いの価値観の違いをぶつけあい、説得しあう過程で、コミュニケーション能力を鍛えることができる。

〈作業3〉 今度は、生活の持続可能度の順に並ぶように指示する。

〈作業4〉 写真から学んだこと、並ぶ時に出し合った意見などをプリントに整理して提出させる。

（資料3）

パラグアイのオムライス
組 番（ ）

◎南米と言えは……
（自分の答） _____
（他の人の答） _____

◎パラグアイの写真や資料を見たり、話を聞いたりして考えたこと、疑問に思ったことなどを書いてください。

（資料4）

地球家族
組 番（ ）

Q1 この家族はどんな物を持っていますか

Q2 家族にインタビューしたいこと

Q3 豊かさの順に並んでみて考えたこと

Q4 生活持続可能度の順に並んでみて考えたこと

3. 資料集め

イメージをつかんでテーマが決まってきたら、資料を集める作業を図書館で行う。のりとはさみ、新聞を数日分用意させる。

途上国に関わる記事を探し、切り抜いて②で配ったプリントの裏面に貼り、コメントをつけて提出させる。記事の本文に傍線を引いておくと、後で書くときに見やすい。コメントは、その記事に興味を持った理由や、驚き、関心、疑問などを数行書けばよい。

新聞の他に、JICAの「国際協力」誌、岩波ジュニア新書、岩波新書、現代社会の資料集なども役に立つ情報源である。切り抜きができないものは、コピーをするか書名と引用ページを書くように指示する。この時、新書を借りていく生徒もでるので、図書館での作業がいきる。

2時間はこの作業に充てたいが、それでも資料を自力では集められない生徒がでてくる。次時から全員が書く作業に入れるように、教師の側で資料を用意する必要がある。書きやすそうな記事をストックし、何枚かコピーもしておく。

4. おわりに

原稿用紙に向かうまでに、数時間をかけた。いよいよ執筆である。まず、必要事項を募集要項に従って書かせる。必ず提出することの確認のためでもある。資料の不足する生徒には、用意したコピーも渡す。後は速い生徒なら1時間、ふつう2時間を充てれば完成できるので、その後は課題とする。

今年度はこの方法で、同僚にも参加協力してもらい、応募数は関西地区で一番多くなった。本部審査の努力賞を受賞した生徒もいる。それよりも、作業をおえて多くの生徒たちが、楽しく取り組めたという感想を持ってくれたことで、成功だったといえると思う。

「新聞をこんなに真剣に読んだことがなかったが、読んでみたらおもしろかった」「こういう機会がなければ、途上国の問題を身近に考えることはなかったと思う」。生徒たちのコメントは、各自がいろいろと得るものの多かったことにふれている。ひとりでも多くの先生が、授業やHRでコンテストをとりあげられて、生徒たちが途上国のことと日本のこと、世界のことを考える機会が増えることを願う。

特別活動における開発教育の実践をめざして ～ユネスコ活動、それは開発教育の原点～



岩手県立釜石工業高等学校
教諭（工業） 高橋壯治（マレーシア班）

1. はじめに

「戦争は、人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。政府の政治的および経済的取り決めのみに基づく平和は、世界の諸人民の一致した永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって平和は失われな
いたためには、人類の知的精神的連帯の上に築かなければならない」(ユネスコ憲章前文)

1969年、私はこの憲章前文に触れ、これぞ“平和の理念”であると確信しそれ以来今日まで、企業で、地域で、学校でユネスコ活動を続けてきている。

「国際化」が叫ばれて久しいが、「真の国際化」が進まず、相変わらず欧米指向が強
くアジア・開発途上国軽視の日本社会、日本人の心……しかしながら次代の日本を担う生徒たちには、確かな平和理念を学び、欧米指向のみではなく、アジアをはじめとした途上国へも関心を持ち、その現状を正しく理解し、その違いを認め共生する心を養ってほしい。そして行動する若人に育ててほしいと強く願望している。それにはユ

ネスコの“平和理念”をしっかりと身につけることが重要であり、これが開発教育の原点であると確信している。

特別教育活動における、ユネスコ活動を通した開発教育の実践をゼロから始め、試行錯誤しながら生徒たちと共に歩んだその一端を紹介する。

2. ユネスコとは

ユネスコとは、国際連合教育科学文化機関（United Nations Educational, Scientific, and Cultural Organization）のことで、英語のそれぞれの頭文字を取ってUNESCOとなっている。国際連合の専門機関の一つで、その本部はパリにある。

ユネスコの目的は、教育・科学・文化・マスコミュニケーションの分野で、戦争や紛争の原因を取り除くことである。つまり人の心の中から無知・偏見・差別観などを取り除くことである。従って、ユネスコの理念は、「国境を越えた民衆の心の連帯によって、教育・科学・文化・情報の諸分野を通して民衆の平和と安全を築くこと」であり、この理念によって努力するところぞ

しがユネスコ精神といえる。

3. 高校ユネスコ活動とその現状

高校生のユネスコ活動の多くは、各高校の必修クラブや部活動として行われている。国際平和・国際理解・国際協力をめざし、また、それぞれの地域と密着しながら理想と現実の狭間で悩みつつ、真剣に実践・研究活動を展開している。

毎年夏休みには、全国の高校ユネスコまたは類似クラブのメンバーや教師が一堂に集まる「全国高校ユネスコ研究大会」に参加する。文化系クラブにあっては他にほとんど例を見ない大会で、日本各地の高校生や教師が一堂に会し、日頃の活動や研究成果を語り合うものである。

4. 活動の経過—既存部活動への活動の組み入れ

新任校に「JRC（日本赤十字クラブ）」が部として存在しており、その活動目的がユネスコ活動の目的と類似性が高いことから、JRC活動を通してのユネスコ活動の実践を試みた。

本校は、生徒のほとんどが男子であり、野球・ラグビー等運動部の活動が盛んである。生徒たちの部活動への関心は、運動部での活動である。従ってこのような環境の中で新たにユネスコクラブを創設することは、極めて困難と思われた。

(1) 第1期—活動の類似性の確認と活動の模索

本校の「JRC」は、5名の部員で奉仕活動を地道に続けている。活発とはいえない

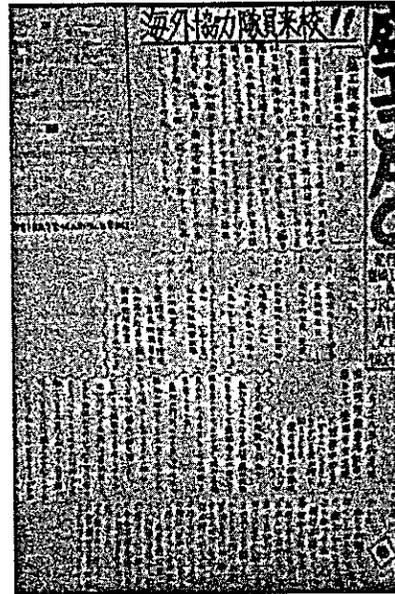


写真1 活動報告会

状況から、生徒たちに改めて「JRC」活動の目的は何かを考えさせた。その結果、「国際的視野を養い行動する」活動が不足していることに気がつく。そこで、奉仕活動と関連づけながら「国際理解のための学習会」を始めることにした。そのポイントを、

- ①日本と外国との違いを知る。
- ②平和理念とは——とした。

①については、自分の興味ある国について調べ、日本との違いについて発表し合う。②については、ユネスコ理念・ユネスコ精神について学習した。

部員一人ひとりが調べた国は、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・カナダと大人社会の欧米指向がまともに表れてしまった。これはこれとして、日本と最も身近であり関係の深いアジアの国々や、途上国であるアフリカや中南米の国々に関心をを持たせる必要から、2回目にはそれらの国

から選び調べることにした。

これにより、世界には自分たちとは異なる文化を持ち、異なった生活環境の中で生活している人々がたくさんいる。特に、自分たちには想像できない貧しい生活をしている人々がたくさんいる。それらの人々の国は、日本と関係が深く、日本にとって重要であり、共生しなければならないなど考えるようになった。

この結果については、この年の学校祭に部活動の発表として、途上国パネルとともに公開展示した(写真1)。このことは、校内外の人々に国際理解・途上国理解への関心を高める大いなる一歩となったのである。

(2) 第2期一活動の組み込み

国際理解・途上国理解の必要性の認識が深まったことから、さらに外国のことを知りたい、できるだけ多くの生徒たちが参加できる活動をとの思いから、具体的活動を組み入れることを生徒たちとともに考えた。

この際に、生徒たちに重要なこととして次の2点を問いかけ認識させた。

ア “国際理解は自国理解から”。外国理解の前に自分の国、自分の住んでいる地域を理解することが必要である。それから始めるべきである。地域の歴史、伝統産業、



写真2 隣接高校留学生との交流会

民話、祭り、民芸品などを再発見するなどの学習をし理解を深めること。

イ 常に外国への興味・関心を持つこと。日常、新聞やテレビなどで報道される外国についてその事情、日本とのかかわりなどについて考えること。

“自国理解”については、現在までに学習し、体験してきていることから活動としては取り上げず、“外国理解”に重点を置くこととした。

まず、“可能な身近なことを”とのことから次の3点が挙げられた。

①本校ALTとの話し合い、交流する(週2回来校、アメリカ出身)

②隣接高留学生を招待し交流する(女性徒、カナダ出身)(写真2)

③高校生国際交流事業派遣生徒の報告会(本校生徒、アメリカ)

以上を実行するにあたり、これでは“欧米に偏り過ぎ”ではないかと問いかけ、さらに考えさせた。その結果、次の2点を追加することにした。

④岩手大学留学生を招待し交流する(途上国から、1回2名)

⑤青年海外協力隊員OBの方を招待し話し合う(1回2名)(写真3、4)

早速、岩手大学生徒課、青年海外協力隊員を育てる会県事務局に依頼したところ、快諾していただき、今後も継続して協力していただけることとなった。それに、「隊員活動パネルや各国の児童画も貸与できるので展示しては」との助言・協力が得られ、6つ目の活動として継続実施できることを確認できた。

岩手県は、22の市町村に地域ユネスコ

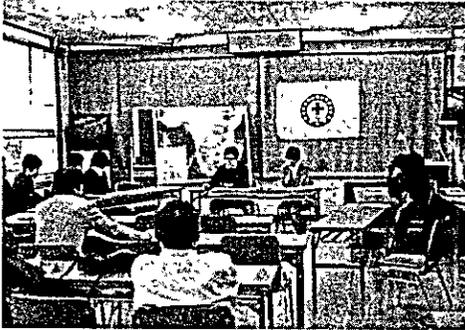


写真3 青年海外協力隊員OBと語る会



写真4 青年海外協力隊員OBと語る会

グループがあり、それぞれユニークな活動をつづけている。活動の中には高校生の活動できるものもあり、参加することは地域交流・地域理解としても大変意義深く、ぜひ参加させたい。

また、夏休み中に開催される「全国高校ユネスコ研究大会」への参加や「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」応募、参加に努め、同世代の高校生が何を考え、何をすべきか意見交換をし、体験をする絶好のチャンスであることを話し、参加を促した。

3年間、生徒たちと試行錯誤しながら取り組んだ結果、部員は17名に増加し、学校全体に、生徒たちの心に「国際理解とユネスコ活動」への関心が広がってきたという実感が湧いたのである。

(3) 第3期—活動の計画的実施

過去5年間の生徒たちとともに試行錯誤を繰り返し実施してきた活動を表1のように計画的に実施した。

活動実施にあたり、1つの活動に2～3名の担当者を決め準備・実施を進めた。どの活動もポスターを作成・掲示し、生徒への案内文を作成・配布する。当日の会場準備、会の運営などは必要最小限とし、過重負担にならないよう配慮した。生徒たちは、慣れないことばかりで、ややもすると投げ出ししたり、これがきっかけとなってやめてしまうことにもなるので顧問教師が常に相談に乗り、励まし、リードすることが重要である。従って、外部との交渉・連絡はほとんど顧問教師が担当した。

紆余曲折を経ながら実施したところ、活動への参加者が徐々に増加し、部員の苦勞が実る結果となった。そして、活動主催者名を「JRC&ユネスコ」と称することが暗黙のうちに認められたのである。

表1. 実施活動

	【国際理解活動】	【奉仕活動】
4月		緑の羽根街頭募金
5月	海外生活体験を語る会 (海外派遣生徒報告会)	交通違反育英街頭募金
6月	世界の友と語る会I (隣接高留学生との交流)	花壇造り、手入れ(随時)
7月		福祉施設慰問、手伝い
8月	全国高校ユネスコ研究大会参加	
9月	国際理解・協力のための高校生主張コンクール応募・参加	活動報告会(県高文連主催) 福祉祭り参加 福祉作文応募
10月	世界児童画展	献血手伝い
11月	青年海外協力隊員OBと語る会(2名)	赤い羽根街頭募金 福祉施設祭り手伝い
12月	ALTと語る会	
1月		愛のベン運動協力
2月	世界の友と語る会(岩手人学留学生、2名) 地域ユネスコ活動参加(随時)	手話講習会(月2～3回) 家庭看護法の受講(月2回) 古切手の収集(随時)

しかしながら、奉仕活動と二本立てで実施することは、生徒たちには忙しすぎて消化不良になることが予想される。そこで、生徒たちとよく話し合い、2年目からは、奉仕活動も含め活動を精選し、効率良く、無理なく実施できる計画を立てることにした。

今後は、生徒たちが今日までの経験を生かし、自主的に取り組める計画を立て、実施することを期待している。

5. 終わりに

高校時代に、平和の理念を培うことは、“心の中に平和の岩”を築く上で大変重要であり、開発教育推進の原点である。

教育の国際化は何も、外国へ行ったり、外国人と接することだけではない。人間がともすると心の奥底で持っている強者へのおもねりをぬぐい去り、弱者や異なった意見の持ち主をいかに尊重するかである。それは外国人に対してだけではない。日本人同士の、ふだんの意識の中でも、国際化の芽は育つはずである。身近にいる人により

よく接することができる、自分と異なった考えを持っている人間とつきあっていけるような教育ができれば……。

今回の実践は、学校の実態や生徒の意識状態より、特別教育活動の中で生徒たちが、無理なく実践可能な、誰もが参加しやすい活動を通して、自分・日本・外国理解への興味・関心の高まりと、行動を促そうとしたものである。重要な点は、国際理解活動と奉仕活動を関連づけて活動することにより、最も大切な“心の国際化”の芽を育てようとしたものである。

このような実践の積み重ねにより、「地球上すべての人々が、平和に暮らすことを困難にしているあらゆる状況に、無知であったり、無関心を装うことなく、国境を越えて、相手の痛みを自分の痛みとして受け止める心の優しさを持って、具体的な課題に取り組むための心を養って」ほしい。そして“資源のリサイクル運動”など環境保全や、“フォスタープラン”“識字運動（ユネスコ世界寺子屋運動）”など国際奉仕の行動へとつながることを期待してやまない。

大いなる願望を込めて……!!